

大菩薩峠

駒井能登守の巻

中里介山



甲府の神尾主膳かみおしゆぜんの邸へ来客があつて或る夜の話し、

「神尾殿、江戸からお客が見えるそうだがまだ到着しませぬか」

「女連おんなづれのことだから、まだ四五日はかかるだろう」

「なにしろ有名な難路でござるから、上野原あたりまで迎えの者をやってはいかがでござるな」

「それには及ぶまい、関所の方へ会釈えしやくのあるように話をしておいたから、まあ道中の心配はあるまいと思う」

「関所の役人が心得ていることなら大丈夫であろうが、貴殿御自身に迎えに行く心があつたら、近いところまで行ってごらんになるもよろしかろうと思う」

「しからは、勝沼あたりまで行つてみようか知らん」

「勝沼までと言わず、いつそささい箆子を越えてさるはし猿橋あたりまで行つてみてはいかがでござるな」

「箆子を越えるのはおっくうチト億劫だが、しかしまだてんもくざん天目山の古戦場を初め、あの辺には見ておきたいと思つてそのおり機会を得ない名所がいくらもある、そう言われるとこの際、行つて見たいような氣持がする」

「行つて見給え、江戸からのお客というのを途中で迎えて、それを案内してあの辺の名所を見物し、その帰りにえんざん塩山の湯にでもつか浸つてみるも一興であろう」

「左様、それではひとつ、氣休めをして来ようかな」

「それがよかろう」

と語り合っている一人は神尾主膳で、一人はわけべ分部という組頭。

この二人が別懇べっこんの間柄であることはこの会話でも知れます。この話をしているところへ、

「お客様、山口四郎右衛門様がおいでになりました」

「ナニ、山口殿が見えたと？ それはちようどよい、分部殿もおらるる、直ぐにこれへお通し申すがよい」

「かしこ畏まりました」

まもなく山口四郎右衛門というのが入って来ました。

「やあ、分部殿もおいでか。大分寒くなりましたな、山国である故、寒さの来ることも早いのはぜひもないが、それにしてもまだこんなはずはあるまい」

「左様、八ヶ岳にも雪が深いし、じぞうだけ地藏岳も大分被かぶりはじめたよ
うだから、それが風のかげんで甲府の空を冷たくするのであろう、なかなか寒い」

「まあ、ここへ来て温まり給え、寒さ凌しのぎに一献いっこんまい参まゐらせる」

「催促をしたようで恐れ入るな」

「拙者ひとりで寒さ凌しのぎをやるうと思つていたところ、折よく分部殿がお見え、それにまた貴殿のおいでで甚だ嬉しい、ゆつくりと寛くつろいで行つてくれ給え」

三人は飲んでようやく興が加わる時分に、山口四郎右衛門が何をか不平ふへい面に、

「御両所、近いうちに新しい勤番支配が来ることをお聞きなされたか、その風聞うわさがたぶん御両所の耳にも入つたことと存ずる」
「ナニ、支配が来ると？　しからは今まで欠けていた勤番支配の穴が埋まるのか、それは初耳じゃ、我々はトンと左様な噂うわさは聞かぬ。して、いかなる人がどこから来るのじゃ」

神尾と分部とは、自分たちの上に立つべき勤番支配の一人が

新しく任命されて来るといふ報告を、山口の口から耳新しく聞いて意外に感じました。単に意外に感ずるばかりではなく、不安と妬心としんとがきらめいて見えるのです。

「左様か、まだ御両所にはそのことをお聞き召されなただか。しからばお話し申そう、このたびお役目を承つて我々共の支配に来るのは、表二番町の駒井じや」

「ナニ駒井？ 二番町の駒井能登が来るのか、あの駒井が」
神尾主膳は他人事ひとごとでないような思い入れで、いそがわしくまばたきをしました。

「いかにもその駒井能登守」
「左様か、駒井が来るのか」

神尾は絶望して、取つて投げるような返答ぶりでした。

「太田筑前殿は老巧ろうこうもの者だ、我等が上にいただいても敢て不足あえはな

いが、駒井は何者だ、あれは我々よりズット年下、しかも知行高ちぎようだかも格式も以前は我々に劣ること数等、若い時は眼中に置かなかつたものじゃ。今となつてあれに先を越されて剩え、我々が支配あまつさとして頭に頂かねばならぬとは情けない。ああ、そう聞いては酒がうまくない、世の中が面白くないわい」

「それは我々も同じこと。なるほど、駒井は学問は多少あるにはあるだろう、我々が道楽をして遊んでいた時分に、あいつは青い面かおをして書物と首つ引きをしていたのだから、相当に理窟は言えるようになったらうけれど、それよりもあいつの得手えては上役に入ることだ、老中ろうじゅうあたりに縁があつて、胡麻ごまをすつたその恩賞で引上げられたのだ、あいつは頼もしそうな面をして老中あたりの頑固がんこれん連を口説くどき落すには妙を得ている」

「駒井も駒井だが老中も老中だ、いったい我々甲府勤番を何と心

得ている。なるほどいずれも相当にしたい三昧さんまいをし尽した報いで、こんな狭い天地ひっそくに逼塞ひっそくはしているけれど、以前を言えば駒井の上に出でるものはいくらかもある。言わば甲府勤番は苦労人の集まり、粹人の巢ねどと言うべきだ、容易な人間でその支配が勤まると思われするのが大不足だ、相当の人を遣つかわすのが、我々へ対しての礼じゃ。しかるに駒井如じやくねんものき若年者をよこして我々の頭に置こうなぞとは、見縊みくびられたもまた甚だしい哉かな。二百余名の甲府勤番がそれで納まるか知らん、駒井を頭にいただいて唯々いいたくたく諾々とその後塵こうじんを拜して納まつているか知らん。もしそれで納まつているようなら世は末だ、徳川の天下もいよいよ望みなしじゃ」

「その通り、我々が不平なるが如く、二百余名の勤番、誰とて駒井を快く思うものはあるまい。さりとて公儀からのお役目、それを反そむくというわけにもいくまい。いよいよ駒井が来たら我々

其の覚悟はどうじゃ、いかなる思案を以て駒井を迎えるか、あらかじめ腹をきめておかねばなるまい」

「拙者は病氣所勞と披露ひろして当分は引籠ひきこる」

「病氣所勞もよからうけれど、いつまでもそうは言っておられぬ。もつと男らしい手段はないか、甲府勤番の反そりの強さを見せつけて、駒井の胆たんを奪うてやるような仕事はないか、駒井が着く早々縮み上つて尾を捲いて向うから逃げ出すような謀はかりごとがあらば、これ以て甚だ痛快なる儀じゃ」

「なるほど」

「機先を制して駒井能登を圧倒するのじゃ、そうして、甲府勤番には骨があつて、彼等如き若年者で支配などとは以てのほかというところを、老中にまでも思い知らせてやるのじゃ、それをせねば後來のためにもならぬ」

「なるほど」

ここに三人の不平が火を発するほどに強くカチ合つて、そうして彼等の上に来るべき、年の若い新しい支配のろというのを呪い尽すの相談が持ち上つてしまいました。

甲府の勤番支配は三千石高の芙蓉間詰ふようのまづめであります。その下には与力よりきが十名と同心が五十人ずつあつて、五百石以下の勤番が二百人は甲府の地に居住しています。支配は二人であることもあり一人は欠員のままであることもあります。御役知おやくちは千石で、本邸は江戸にあつて住居は甲府へ置く。

駒井能登守が勤番支配に任命されたのはどういふ意味だかよく判りません。或る者はこれを榮転ねただとして嫉みます、或る者は左遷だとして悲しみます。とにもかくにも能登守がまだ三十に足らぬ若年者であつてこの地位に置かれたことは、ドチラに

してもその人物の非凡である証拠にはなりません。

その頃の幕議に長州出兵論というのがある。薩州と長州との横着おうちやくがあまりといえば目に余る、どうしてもまず長州から征伐してかからねば、幕府の威信が地に落つるというのが、長州出兵論の根拠であります。この長州出兵論を唱える者の中には、徳川譜代恩顧の者で徳川にとつては無二の精忠者ぼつまんがあります。これらの人は本心から薩長あたりの暴慢ぼつまんをにくんで、徳川のために死のうという連中でありました。またそれらの熱心な長州出兵論を鼻の先でセセラ笑っている者もありました。これは徳川とはあまり縁の薄い方の平民側の中の蔭口に多いのです。その言い草を聞けば、

「ナンだ、長州出兵なんて、よけいなことだ。お膝元を見るがいい、貧窮組がああして騒ぎ廻っているじゃないか。貧窮組が

ああして騒ぎ廻っている間に、頼まれもしない長州くんだりま
で兵隊を出してどうする気だ。そんなことをするよりは印旛沼いんぱぬま
の掘割りでもした方がよっぽど割がいいぜ」

こんなことを言つて、ばかばかしがつている者もあります。

また一方には譜代以外の者で、盛んに長州出兵に声援を与え
る者もありました。これはずいぶん変り者で、もとより徳川の
ために死のうというほどの縁故もなければ熱心もないのだが、
何か景気をつけて自分たちの仕事をこしらえたいという浪人者、
或いは自称志士の連中が多かつたということであります。口先
ばかりでもなんでも景気のいいことは雷同し易いから、精忠無
二の長州出兵論よりも、景気の良い人たちの唱える出兵論が、
だいで徳川に受けがよくなりました。まかり間違つてもそれに
異議を唱えるような口ぶりをしようものなら、徳川に対して反

逆者でもあるかのように見られたり、薩長の犬であるかのように疑ぐられたりしますから、出兵、出兵、出兵に限るというようなことに傾いて行きました。なんでもドシドシ兵を繰り出して長州から薩摩の果て、琉球までも踏みつぶしてやらねばならぬと意気込みを示した者も大分あつたようです。

この出兵論が正しいか正しくないかは知れないが、いよいよ事実になってみると愚劣を極めたものでした。最初の長州征伐は、どうにかこうにかお茶を濁して幕府の面目をつないだけれども、二度目となつてはカラキリお話になりませんでした。幕府の威信を張るところではなく、かえつてグニヤグニヤと腰が砕けて、長州からあべこべに寄り出されて引込みがなくなつてしまいました。長州征伐をやつても、やらなくても、もうたいてい幕府の寿命はきまつていたのだから、それがいいでもな

し悪いでもないけれど、とにかく長州征伐をやつたために、徳川幕府の寿命がまだ十年持つところを、九年早めてしまったような形勢は争うべからざるものであります。

かつかいしゅう

勝海舟のような目先の見えたものが——そういう場合に出て来たからおたがいに幸いであります。けれどもその勝さんすら、いよいよ長州征伐が手に負えなくなつた時に引っぱり出されたので、それまで引籠りを仰せつけられて幕府から勘当を受けていたような有様でありました。

駒井能登守はこんな時節に、甲州の山の中へ来るようにさせられたということも何かの廻り合せでありますよ。

駒井能登守が甲府へ入ることを悲しむ連中は、こんなことを言います、

「あれは山の中へ送るべき人間ではない、海の外へ向わせなけ

ればならない人物だ、外国との折衝せつしようがこれほど面倒になつてゆく世の中に、あの人物を山の中に送り込む当局者の気が知れない、駒井を甲州へやるのは舟を山へ送ると同じで、しかもその舟も、旧来の伝馬船てんませんや荷足にたりではなく、新式の舶来の蒸気船だ、蒸気船を山へ積み込むとは、なるほどこのごろの徳川幕府のやりそうなことだ」

これは駒井びいき鼻眞びいきの方の言い分で、駒井が西洋の知識に暗からず、且つ外交官として相応ふひわしい器量のすべてを持っているように信じている者の口から出ました。

それと反対の方の言い分はこんなものであります、

「あれは若い者共には人気は相当にあるけれど、本人はただ西洋の知識を多少心得ているというだけのこと、実務にかけてはいいかげんの無能者で、時々調子はずれたところで思い切つ

たことをするから、危なくて仕方がない、腫物はれものに触さわるようなこのごろの外国向きのことに、あんな青二才を使えるものではない、甲州の山の中へ入つて、摺すれからしの勤番の中で揉もまれて来るのが身のためだ」

これは駒井を多少けむたがつている老成者の間から出る評判でありました。とにかく未知数の人間だけれども、どのみち、まだまだ叩き上げなければものにならないという嫉しつお悪と軽侮けいぶとそれから、幾分けいか敬畏けいの念も入つているのであります。

そうかと思うとまたこんな一説もあります。幕府は駒井の人物を見抜いてワザと甲府へ納めるのだ、甲府は天険であつて、まんいち徳川幕府がグラつき出す時は、そこが唯一の根城となる、まんいちの場合をおもんばかつて、駒井を遣つかわして地利や兵備を調べさせておくのだと。これもまた駒井鬮おくそう原の者の臆想

でありました。

またその他の一説は、駒井能登守が甲州入りをするようになったのは、高島四郎太夫に關係することである、駒井は早く四郎太夫に就いて洋式の砲術を研究したり、西洋の事情を調べたりしたから、高島と同じような嫌疑けんぎでこの左遷させんを蒙こうむつたのだと。これも駒井崇拜の若い人々の口から洩れて来るのでありました。

高島四郎太夫（秋帆しゅうはん）が幕府から怖れられたのは、他の勤王

家の連中が幕府から怖れられたのとは全く違います。秋帆には大藩を動かして権力を争つてみようとか、砲術を研究してそれによつて虚名を博そうとか、そんな野心は少しもなかつたものであります。国内のことに空むなしく慷慨悲憤こうがいひふんしている連中などの、梯子はしごをかけても及ばないところにその着眼と規模とがあつて、長崎の微々たる小吏でありながら、諸侯の力を借りずに独力で

もつて大事を行うほどの実力を持つていたから、それで怖れられたのです。けれどもその秋帆とても、もう罪（？）を赦ゆるされて、江川太郎左衛門を助けていろいろ熱心にその研究をつづけている時分のことであつたから、なにもいまさらその祟たりが駒井能登守へ報むくつて来るといふ理由はないことなのであります。

とにもかくにも、こんな風評の間に送られて、行先ではまた神尾あたりの、あんな悪感情に迎えられて甲府へ乗り込む若い支配の前途も多事でないことはありません。

その行列は存外手軽てがるで、僅かに与力同心と小者の類たぐいと同勢十人足らずで、甲州街道を上つて行きました。

甲府の城内へも、いつ出かけていつ到着するといふ沙汰なしに出かけましたから、出迎えの来るべき模様もありません。

駒井能登守は若くてそうして美男でありました。大森か川崎

あたりまで遠乗りをすらくらいの心持で、陣笠をかぶり馬乗袴を穿はいて、十人足らずの一行と共に駒木野こまぎのの関所へかかつて来ました。

関所の役人も実は驚いたくらいで、今ごろ不意に勤番支配がおいでになろうとは思いませんでしたから、多少狼狽ろうばいしてこれを迎えました。能登守はその関所へ暫らく休息して、関所役人から附近のはなしなどを聞いていました。

その時ちようど駕籠かごで乗りつけて来た一人の女が、駕籠から出て関所の前へ通りかかりました。

「これこれ、其方そのほうはどこへ行く」

関所役人が呼び止めますと、その女は、

「甲府の方へ参ります、どうかお通し下さいまし」

「手形を持つておるか」

「はい、持つて参りました」

女は鼻紙袋を出してその中から、一枚の厚い御手判紙おてはんがみの畳んだのを役人の前に捧げますと、

「ええ、其方そのほうは女軽業の芸人を引連れ……かくと申す女であるな」

「左様でござりまする」

「このお手形には二十余人の一座と書いてあるが、その者共はどこにいる」

「それはあとから参りまする」

「待て待て、このお手形の日附が違う、エーと、其方は今より三月ほど前にこの関所を越えて甲府へ出たことがあるように覚えていますが、これはその時の手形だな」

「ええ、その……」

「ならん、斯かよう様なものは用向の済み次第お上へ御返納申さねばならん、これを以てお関所を通ることは相成らん」

「では、そのお手形では通れないんでございますか」

「左様」

「それではお書換えを願いたいものでございます、急に甲府まで参らねばならないんでございますから」

「ばかなことを言うな、そう急に書換えなどができるものではない、江戸表へ立帰つて相当の手續を踏んでお願い申せ」

「そんなことをしてはおられません、わたしの連つれあ合あいが甲府にいて、急にわずらいついて、大へん危ないのでございますから、どうぞ、お通しなすつて下さいまし、お手形は古うございますけれど、この通り少しも怪しいものではございません」

「怪しい者であろうともなかるうとも、拙者はお関所を預かる

役目、手形のない者は通すことならぬ」

「それではわたしが困つてしまいます、もし連合いにでも亡くなられてしまったら、わたしは死目しにめに会えないじゃございませんか、助けると思つてお通し下さいまし」

「わからぬことを申すな、其方そのほうの事情がどうあろうとも、お上の御法を曲げるわけには相成らぬ」

「それでもせつかくお江戸からここまで来たものが、どうしてまたお江戸へ帰られましょう、ほんとにこうしている間も気がせくんでございますから、お通しなすつて下さいまし、女一人ぐらい通して下すつたつていいじゃありませんか、お目こぼしということもあるじゃございませんか、どうぞお頼み申しますよ」

この女は女軽業の頭かしらのお角でありました。お角は一生懸命に

役人に頼み込んでみました。が、許さるべくもありません。

「くどい！ この上かれこれ申すと処分致すぞ」

役人は言葉を荒くして叱りつけます。

「おや、これほどにお願い申すのに判らないお役人なこと」

「何を申す」

お角があまり強情だから、役人は立つて抓つまみ出そうとしました。

縁に腰をかけて見ていた駒井能登守が、

「これこれ松浦」

用人を呼びました。

「はい」

「あの女、血迷うているようじゃ、其方が行つてもと来た方へ追返してやれ」

と言つて、能登守は扇を持つて指図をしました。能登守が元の方へ追い返してやれと扇で差し示した方向は、女がもと来た江戸の方ではなく、これから行こうという甲府の方でありました。

松浦はそれを心得たようにズカズカと女の傍へ来て、

「これ女、お関所の前で左様なことを申してはならぬ、早く立帰つて出直して参るがよい」

と言つて、女の手を取つてグングンと引張り出しました。

「これほどにお願い申してお聞き入れがなければそれまででございます、もし連合いが甲府で亡くなるようなことになれば、わたしは江戸へ帰つて親類の者やなにかに面かおが会わされませんから、ここで死んでしまいます、お関所の前で死んでしまします」

「さてさて女という者は聞入れのないものじゃ、死にたくば他

へ行つて勝手に死ね、お関所を汚けがすことは相成らぬ」

無理無体に引張り出されたから、女の力で争うことはできません。

「ほんとに口惜しい、わからないお役人だ、わからずや」

お角は引摺ひきずり出されてしまいましたけれど、その引摺り出されたところは意外にも甲州口でありました。

「おろかもの
「愚者め」

ポンと関所の外へ突き放されて腰が砕け、暫らく起き上れないでいたが、起き上った時分に気がついてお角は喜びました。

「ああ、わかつた、あの若い殿様が粹すいを利かして下すつたのだ、もと来た方へと云つて、ワザとわたしを甲州口の方へ突き放すように、御家来の方に指図をなされたものを知らずにお怨うらみ申したわたしは、やつぱり女だから馬鹿だね。殿様、有難う存じ

ます、あとでお礼を申し上げまする」

お角は起き上つてお関所の方へ向いてお礼を言いました。

それから大急ぎで甲州の方へ歩いて行きました。

が、ん、り、き、に出し抜かれてしまったお角は、こうして前後の考
えもなくそのあとを追いかけて来ました。お角にとつては、が、
ん、り、き、がそれほど可愛ゆいわけではなく、お絹という女が憎
らしくてたまらないのです。あんな古証文を突きつけて人をば
かにした上に、またが、ん、り、き、と一緒になつてこれ見よがしの振
舞でもされた日には、意地も我慢もあつたものではないのです
から、お角はあとを追つかけて来ました。

腕こそ一本落したけれど、足の方に変りのないが、ん、り、き、の歩
きぶりは、到底お角の足を以て如何いかんともすることはできません。
ましてが、ん、り、き、の方は変則な道を通り、裏道を行くのは慣れて

いるから、お角が追いかけてみたところで到底ものにはならな
いけれども、どのみち行く道筋は甲州街道で、落着くところは
甲府、先へ行ったのは女連、途中どこかで追いつかなければ、
甲府で落ち合う。その時は、が、ん、り、き、とあの後家様をつかま
え、思う存分荒れてやろうと、例の如く懐中には剃刀かみそりなんぞを
忍ばせて、駕籠を飛ばせて来たわけです。

幸いにうまくお関所が抜けられたけれど、これから先がほん
とうの難所、女一人こぼとけで通れるはずの道とも思われません。

お角が一人こぼとけで小仏の方へ行つてしまつてから、駒井能登守の
一行がこの関所を立つて同じ方向に出かけました。

関所で駕籠乗物の用意をするというのを謝絶ことわつて、やはり馬
で行きました。険岨けんそな道へかかつたら馬から下りて歩くと
言つて出て行きました。

小仏の宿しゆくから峠まで二十六丁。

「しかしあの女は愚かな女じゃ、駒木野を越えたからとて、まだこの先に上野原の関所もあれば、駒飼こまかいの関所もある、関所よりもなお難渋な、小仏峠というものもあれば笹子峠というものもある、これを知ってか知らずか、女一人で甲府まで乗り込もうというのは、大胆と言おうか、愚かと言おうか」

これを話のはじめに、与力同心のなかでいろいろの話が持ち上りました。

「いや、あれは真実、亭主の病気を思うて出かけて来たのかどうかわからんが、とにかく何か思い込んで来たような女である、あんなのが何か思い込むと大胆なことをするものじゃ」

「左様、女軽業の元締もとじめとか言いおったが、彫物ほりものの一つもありそんな女じゃ、しかし悪党ではないらしい」

「悪党ではあるまいが、悪党に変化しそうな女である、あれが悪党になると鬼神のお松といった形で、この峠の上などに住みたがる」

「いや、そういうことはあるまい、あんなのはまかり間違つて亭主を剃刀で切るとか、胸倉を掴んでギユウと締めるといった程度で、それ以上のだいそれたことはできまい。むしろ平常は内気でおとなしく、口も碌ろくに利かないような女が、時とすると大胆なことをする」

「それはどつちとも言い兼ねる、女はハズミ一つであるから、そのハズミの具合によつていかなることをやり出すかあらかじめ断わりはできない、女そのものの性質というよりも、時のハズミが女を賢婦人にしたたり毒婦にしたりする例ためしが多い」

「それも一理はあるようじゃ。しかしそれではハズミというも

のをあまり重く見過ぎたきらいがある、いかにハズミが附いたからとて、政岡まさおかが、鬼神のお松になることはなからう」

「性質にもよりハズミにもよる、罪はその両方にあると見るのが穏当であろう。明智光秀あけちみつひでの如きも、信長公があれほどの短気でなかつたならば、謀叛むほんはしなかつたであらうが、たとえ信長公が短気であつたところで、光秀そのものに謀叛気がなければ、あんなことにはならぬ」

「要するに鐘と撞木しゅもくの間あいが鳴るといふところで、我々共の役目においてもその通り、強く罪人を扱うてかえつて罪を大きくしてやることになり、或いは寛ゆるやかに扱い過ぎてかえつて増長を来すようなこともある」

「寛嚴よろしきを得たりといふことは治政の要術で、その術はまた治者の人格である、くだらぬ人格の者が、みだりに寛嚴の

術を弄ろうすればかえつて人の輕侮を招く」

「大阪の与力大塩平八郎の事件などがそれじゃ、あれは跡部山城守殿あとべやましろのかみどのが大塩を見るの明めいがないから起つたことである。奉行が大きければ大塩は非常な用をする、奉行が小さくて大塩が大きかった故あんなことになつたという説がある」

「大塩はとにかく近代での人物である、是非善悪は論ぜず、貧民のためにあれほどのことを為し得る奴はほかにはあるまいと思われる、あの乱もまた大塩自身の人物もあろうけれど、時のハズミというものもなきにあらず」

「国民の富豪に対する怨恨うらみがようやくやくに熟していたから火蓋ひぶたが切られたのじゃ。それにつけても思うのは、このごろ江戸に起つた貧窮組、浅ましいようでもあるし、おかしいようでもあるが、あれもまた時世いましを警いましむる一つの徴しるし候」

駒井能登守の一行は、時事を論じたり、風景を語つたりしながら、小仏峠の頂上まで登つてしまいました。

頂上に中の茶屋があつて、そこに休んで見ると赤飯せきはんがありました。その赤飯を大盤振舞おおばんふるまいにして与力同心、仲間馬方に至るまで食いました。能登守もまたそれをつま喜んで食いました。なおお茶を飲む者もあれば水を飲む者もあります。頂上まで上つて見ればこれからは下りであります。下り道は上り道よりも楽であります。上野原泊りの予定は、遊びながらも着くことができるのであります。

能登守は柄に似合わない健脚でした。いちばん早く参るだろうと思われた能登守がいちばん疲れないで歩いて来ましたから、「御支配は健脚だ、いや身体の華奢きゃしゃなものほそれだけ足の負担が軽いからそれで疲れないので、我々は頑健肥満に生れた罰で

かえつて山路に難渋する」

と言つて、与力のなかで、いちばん肥満していちばんよく話をした男が、いちばん早く疲れて愚痴を言いました。

「おのおの方は、あまりよく口を利きなさるからそれで疲れるのだらう、すべて險岨けんそを通る時や遠路とちみちをする時は、あまり口を利かない方がよいそうじゃ」

能登守はこう言つた。なるほど、いちばん疲れない能登守がいちばん喋しゃべらなかつた。

「無言で氣息を調ととのえて歩けばよろしかろうけれど、そこが旅は道づれで、いろいろの話をして歩きたいのが凡夫の常だ。よしよし、今度は無言の行を続ける」

とにかく、中の茶屋で休んで、赤飯などを囓かじっていると、誰も彼も疲れなどは一時に忘れてしまいました。その元気で茶

屋を立つて下りにかかりましたが、上りに懲りて無言の行を続けると言った肥満の与力は、じゅうめん 渋面を作つて口を噤んで歩きましたが、それにひきかえて能登守が今度はいろいろの話をやり出しました。街道筋の地勢や要害を指さしながら、土地案内の与力同心に聞いてみたり、自分の意見を述べてみたりしました。時々諧謔を弄して一行を笑わせたりしました。それで話の花が咲いて、登りの時より一層賑やかになりました。強いて口を噤んでいた与力の連中もまた談話中の人となつて、疲れた足を引きずりながら、息をはずませて気焰を上げていました。

山腹の左の方からたにみず 溪水が湧き出て滝のように流れています。それが深い谷に落ちてふち 淵になったり、また岩に激して流れ出したりする変化が面白い。その溪水を幾十曲りもして見ると、向うに二軒の茅屋あばらやが見える。その前に板橋があつて、溪水がそこ

へ来て逆に流れている景色がなかなか面白いから、一行はそこで暫らく立つて景色を見ていました。すると駒井能登守が、

「あれ見よ、あの家の後ろを怪しげな男が通るわ」

と言いました。一同は谷川の景色ばかり見ていたのでしたが、能登守にこう言われて、前の山の二軒の茅屋のところに眼をうつすと、そこを一人の旅人が急速力で、サツサと歩いて行くのを認めます。菅笠を被つて道中差を差して、足ごしらえをしてキリリとした扮装で、向う岸の茅屋の後ろを飛ぶが如くに歩いて行きます。

「あれは何者だ、足の早い奴」

と驚いていると、能登守が、

「いかにも怪しげな奴じゃ、関所の裏を通つたものと見ゆる、誰ぞ行つて追蒐おいかけてみられよ」

「心得ました」

同心が二人、板橋を渡つて向う岸へと飛んで行きました。

怪しげな旅の男はそれを知つて、山の中へ逃げ込んで、かくれ姿を隠したから、追いかけて行つた同心は空しく帰つて来
ました。

「怪しい奴、足の迅いこと無類でござりまする」

同心はまず以て、その逃げ去つた奴の足の迅いのに舌を捲いて復命しました。

「年はまだ若いようであつたな」

「年はまだ若いようでございました、三十の上を幾つか越したくらい、遊び人風の男で、後ろ姿をチラリと見かけましたが、その迅いこと迅いこと」

「なんにしても怪しい奴じゃ、すべてあの通り足の迅い奴には悪

いことをする者が多い、よく演劇や講談に現われる雲霧仁左衛門くもきりにざえもんという悪漢も足の迅い男であつたそうじゃ」

「ああ、その雲霧仁左衛門という悪漢、それはこの上野原から出た奴にございます、この上野原のしかるべき家に生れた悪漢でございました」

「足が迅いと高飛びが自由にできる、それで今日ここで悪事をしても、明日は他国へ行つて知らぬ面かおしている、悪事千里を走るとはこのことじゃ」

「足が迅いから自然、手が長くなるのでございましょう。冗談はさて置き、あの怪しい奴、取逃がしたは残念、直ちに手配を致して取押えさせましょう」

「それには及ばぬ」

「せつかく御支配のお目に留まつたものを取逃がして、面目が

「ござりませぬ」

「向うの岸とこつちでは無理もないことじゃ、まして人間並みを外れた足はずの迅い奴、逃げるのがあたりまえで、逃がした方に罪はない」

「それと知つたら声をかけずに、何か手段があつたらうものを」
「これから先のこと、甲府へ入るまでにきつと、あの者が再び現われることがあるに違いない、その時は油断せぬように」

「心得ました」

与力同心の面々がみな多少の好奇心にそそられました。もとよりこれらの人々がワザワザ手配をして騒ぎ立てるほどの代物しろものではないが、道中の腕比うでくらべというふうなことになつてみると、多少の張合いが出て来るものでありました。それ故、無駄なことと思つたもので、休み茶屋や、泊り泊りにも用心をしてみ

る気になりました。しかしながら別段に変わったこともなく与瀬よせの宿しゆくへ入つて、これこれの者の姿を見かけなかつたかと尋ねてみても、誰もそんな者を見かけたという者はなく、

「ただ、さきほど峠道で若いおかみさんが悪者に苛いじめられているところを、鳥沢の親分が通りかかつて連れておいでになつたばかりでございます」
と土地の人が言います。

「若いおかみさんが悪者に苛められているところを、鳥沢の親分が助けて連れてかえつたと？　してその若いおかみさんというのは……また鳥沢の親分というのは何者」

与力同心が、土地の者の言葉尻しっぽを捉とらえてそれを訊たずねてみました。

よく聞いてみると、峠道で悪い胡麻ごまの蠅はえにかかつて苦しめら

れていたという女は、駒木野の関を通してもらった女であつて、それを助けた鳥沢の親分というのは、鳥沢の衆くめという親分であることがわかりました。

鳥沢の衆ぐんないというのは郡内切つての親分であつて、ずいぶん悪辣あくらつなことをするし、また相応に義侠らしいこともする。この界限かいわいでは厄介者視しているものが半分と、畏服いふくしているものが半分という勢力であることもすぐにわかりました。

それを聞いただけで、駒井能登守の一行は例の通り上野原までやつて来ました。上野原の宿へ着いた時も、先触さきふれがなかつたから役員どもを驚かしました。

御支配のお着きということとは本陣を大へんに騒がせたけれども、そのほかには至つて無事で、一泊して翌日未明に出立。

上野原を出て少しばかり坂を下ると、もうすぐに川でありま

す。川の両岸には川越しの小屋が立っていて、真裸まっぱだかになった川越し人足が六七人ほど、散らばっているのが一目に見えました。

「これが鶴川の渡し場でございます」

「なるほど、先年すわいなばのかみどの諏訪因幡守殿が人足どもに困らせられたという渡しはこれか」

「あれ以来、人足どもも大分おとなしくなりましたが、やつぱり気の荒い郡内の溢あぶれ者ものでござるから、おりおり旅人が難儀する由でござりまする」

「ゆくゆくはなんとか取締りをしたいものじゃ、どこへ行つても、この裸虫には弱らせられる」

一行は川越しの小屋のところまで来ると、宿役人から先に出向いていて、しきりに人足を指図していました。

「おいおい御支配のお通りだ、ほかの旅人は控えているがよろ

しい、御支配のお通りが済んでから通らつしやい」

と言つて、川の両岸の通行を暫らく差押えました。それがために両岸に多くの通行人が溜たまつて、駒井能登守の渡つてしまふのを待つていました。

「どうしたのか、両岸に人がたかつている」

能登守は不審に思いました。

「御支配様、どうぞこれをお召しなすつて下さいまし」

連れん台だいを持つて来ました。屈強な男が二十人ほどでその連台を担かつぐのであります。

「お役人様方は、どうか野郎共の肩にお召し下さいまし」

与力同心の面々は肩車で越えるということでありませう。そのほか仲間ちゆうげん、槍持やりもち、挟箱担はさみばこかつぎ、馬方に至るまで、みな人足の肩を借りたり手を借りたりして、なかなか大業おおぎようなことであります。

駒井能登守はそれと気がついて、

「宿役人、こんな大業なことをしないがよかつた」

能登守は仕方がなしにその連台に乗りました。二十人の人足が
曳えい々えい声を出してそれを担ぎ上げました。甲州に入つての勤番支
配の権威は絶大といふべきものです。この街道を通る参観交代さんかんこうたい
の大名はあまり数が多くはないが、それらの大名が通る時より
も、勤番支配ていの通る時の方が鄭重ていぢゆうでありました。能登守は、それ
がために数多あまたの通行の人を留めてしまったことを気の毒に思つ
て、早く手軽に通つてしまいたいのだが、鄭重にするために宿
役人は川越し人足の勢揃いや人数配りに手数をかけてなかなか
に時間を取るのであります。能登守の連台がやつと担ぎ出され
て、与力同心の面々の肩車がそれにつづこうとした時に、上野
原の方から慌あわただしくこの場へ飛んで来たのは誰あろう、宇治山田

の米友でありました。

二

米友は例の通り跛足びっこを引いて、杖つえをついて、横つ飛びにこの河原まで駈けて来て、

「通してくれ、通してくれ、俺おいらが悪いんじゃないやねえ、まだ出か
けねえと言うから、それで安心して待ってたんだ、ところが出
し抜かれたんだ、あいつの口前にひっかかって、無駄話をして
いる間に出かけられちゃったんだ、ぐずぐずしていると俺らが
申しわけのねえことになっちまうんだ、どうか通してくれ」

米友は眼の色を変えて川を渡ろうとしますから、宿役人や人
足までが驚きました。米友のことですから、あんまり周囲の事

情に見さかいがなく、笠と首根ツ子へ結ゆわいつけた風呂敷包が上になつたり下になつたりするのをかまわず、無論、勤番支配であらうが、与力同心であらうが眼中になく、やみくもに川へ飛び込んで押渡ろうとするから、忽たちまちドッコイと押えられてしまいました。

「やい、手前は何だ」

「通してくれ、通してくれ、無駄話をしているうちに出し抜かれちゃつたんだ、こうしちやいらねえ」

「馬鹿野郎」

「何だい、何をしやがる」

「よく眼をあいて見やあがれ、川の向うもこつちも通行どめなんだ、みんなああして御遠慮をしているのがわからねえか」

「遠慮なんぞをしちやあいらねえ、人から頼まれて乗物の目付めつけ

をして来たんだ、それが先へ出ちまつたんだ、俺おいらはそのつもりじゃなかつたんだ、まだ出かけねえと言うから、それで安心して待つてたんだ、悪い奴の計略にひつかかつたんだ」

「何を言つてやがるんだい、この馬鹿野郎、引込んでいやがれ」
人足こしは拳こぶしを固めて米友なぐを殴りつけてしまおうとすると、米友はその手の下を潜つて飛び出し、

「お前たちの手は借りねえんだ、一人で越すからいいよ」
尻ひつからを引絡ひつからげて川へ入り込もうとするから、人足どもがバラバラと駈けて来て米友を囲んでしまい、その手を持つてギューギュー引き立て、

「方ほう図ずのねえ馬鹿野郎だ」

ポカポカと二つ三つ食くらわせてしまいました。

「おやおや、打ぶつたね」

「まだあんなことを言つてやがる、叩きのめして簀巻すまきにしてやれ」

「ナゼ打つんだい、ええ、ナゼ俺らを打つたんだ」

「この野郎、ちびのくせに口の減へらねえ野郎だ」

「まあ、おじさん待つてくれ、打つんならお打ち、打たれてもいいからその代り、おじさんここを通しておくれ、ね」

米友は、それでも人足と争うことの不利なるを覚さとつてか、いっぱいしの知恵を出して妥協を試みようとしたが、どうしてこの場合、川越し人足が米友の口前ぐらいで承知するものではないません。

「面倒くさいから叩きのめしてしまえ」

争わずしている米友を、またも拳を上げてガンと食らわせました。

「あ、痛え！」

米友も、さすがに面かおをしかめて痛みを泳こらえねばならぬくらいに手強く打たれて、思わず片手で頭を押えた時に、続けざまにポカポカと拳の雨が来ましたから、米友の癩癩かんしゃくが一時に破裂しました。

「もう、勘弁ができねえ、こいつら甲州街道の川越しの人足ども、あんまり人をばかにしやがるな、ここは手前たちの川じゃあるめえ、甲州街道の鶴川だろう、手前たちがこの川を持つてるわけじゃあるめえ、天下様の往来だい、俺らが通つてナゼ悪いんだ、渡し賃いが要いるならくれてやらあ、手前たちは渡し賃を貰つて人を渡しさえすりやいいんだろう、通すの通さねえの、安宅あたくの関の弁慶あたくみたいなごたいそうなことを言うない、富樫とがしにしちやあ出来過ぎてらあ、第一、手前たちは富樫とがしという面つらじや

ねえ」

さあいけない、米友はまた啖呵たんかを切ってしまった。

米友流の啖呵を切つて開き直ると、手に持つていた杖を眼にもとまらない迅さで取り直して、いま自分を撲なぐつた人足の眼と鼻の間に一刺いっしを加えました。

「あッ！」

その人足はひっくり返る、あとの人足は殺気が立つ。人足を一人突き倒して、しばらく彼等を呆氣あつけに取らした米友は、二三日、河原の向うへツツと飛び越して岩の上へ跳はねあがり、

「俺おいらは伊勢の国から東海道を旅をして江戸の水を呑んで来た宇治山田の米友だ。東海道には天竜川だの大井川だのといふ大きな川があるんだ、こんな山ん中のちっぽけな川とは違つて、水もモツトうんとあらあ、そこには川越しの人足も幾百人とい

るけれども、手前たちのようなわけのわからねえ人足は一人も
いなかったんだ。おじさん、俺らはこの通り足が悪いんだから、
大事にして通しておくれと頼めば、ウン兄あにい、気をつけて歩きね
え、転ぶとお前は背が低いから、浅いところでもブクブクウをす
るよなんて言やがるから、ばかにするな、背は低くつても泳
ぎが出来るんだいと威張つてやると、あははと笑つて通すんだ。
手前たちは山ん中の猿だから世間を知らねえや、だから教えて
やるんだ、東海道の川越し人足はそうしたものなんだ、同じ人足
でも人足ぶりが違わあ、第一、面つらからして違つてらあ。俺らが
急ぎだから通してくれと頼むのを、事情わけも聞かねえで、無暗むやみに
撲ぶちやがる。撲たれていいものなら撲たしてやらあ、こつちに
悪い尻があるんなら、いくらでも撲たれてやらあ、ここまで来
て撲つてみやあがれ。米友が持つておいでなさるこの杖は、杖

と見えても杖じゃねえんだ、まかり間違つたら槍に化けるように仕掛がしてあるとはお釈迦様しやかさまでも気がつくめえ。やい山猿人足、手前たちは世間を見たことがねえから、この米友がどのくらい槍が遣つかえるんだかその見当がつくめえ。山猿と言われたのが口惜しけりやここまで来てみやがれ、米友の槍が怖いと思つたら、早く川を通せろやい」

こう言いながら米友は、持っていた杖を片手に取つてブンブンと振り廻し、猿のような面かおをして白い齒むを剥いて罵ののると、たださえ気の荒い郡内の川越し人足が、こんなことを言われて納まるはずがありません。

「ふざけた野郎だ、叩き殺せ」

この騒さわぎで、駒井能登守の連台を担たぎかけた人足も、与力同心またぐらの股倉またぐらへ頭を突つ込んだ人足も、みんなそれをやめてしまつて、

米友の方へバラバラと飛んで行きました。宿役人は青くなつてその騒ぎを抑おさえにかかります。

意外の騒動が起つたので、駒井能登守はやむなくその騒ぎを見ていました。与力同心の連中もそれを見ていました。いずれも人足どもの騒ぎ、宿役の連中が取鎮めるであろうから自分たちが手を下すまでもあるまい。それで騒ぎの済むのを待つているうちにも、岩の上へ跳おどり上つた米友の無遠慮露骨な罵倒を聞いてハラハラしました。

人足どもも無暗むやみに撲ることは乱暴だが、川越し人足である、これで通つたものを、東海道の人足とは人足ぶりが違ふとか、面つらまで違ふとか、山猿がどうしたとか、言わんでもよい悪口を言っているのはずいぶん向う見ずの無茶な奴だと思つて、その

鎮まるのを待つているが鎮まりません。

「矢でも鉄砲でも持つて来やがれ」

岩の上に立つた米友を下から渦うずを巻いて押し寄せた川越し人足、なにほどのこともない、取とつ捉つかまえて一捻ひとひねりと素手すでで登つて来るのを曳えいと突つく。突かれて筋斗もんどり打つて河原へ落ちる。つづいて、

「この野郎」

手捕てどりにしようとして我れ勝ちにのぼつて来るのを上で米友が手練しゅれんの槍。と言つてもまだ穂はつけてないから棒も同じこと。

これだから米友は困りものです。くれぐれもその短気を起すことを戒いましめられているにかかわらず、短気を起してしまいます。無暗に喧嘩を買つてしまいます。槍が出来るといふ自信があるために人を怖れないし、それに、どうしても曲つたことが嫌い

だから、ポンポン理窟を言つてしまひます。

不幸にしてただ脳味噌に少しく足りないところがあるらしく、それがために時の場合と相手の利害を見ることができません。役人であろうとも雲助であろうとも更に頓着がないから困りもです。お君でも傍にいてなだめたり諫めたりするから江戸へ来て以来はあんまり大きな騒ぎを持ち上げませんでした。大きな騒ぎを持ち上げないこともない、見世物小屋の失敗などはかなり大きな失敗でしたけれども、それがために古市ふるいちにおける場合のように、槍を振り廻すことのなかつたのはまだしもの幸いでしたが、今はとうとう本式の喧嘩を持ち上げてしまひました。しかもその相手が最も悪い、雲助のなかでも最も性質たちの悪い郡内の雲助ですから、米友も実に飛んでもない相手を引受けたものです。市川海老蔵えびぞうは甲府へ乗り込む時にここの川越しに百両の

金を強請ゆすられたために怖毛おぞけを振ふるつて、後にこの本街道を避けて大菩薩越えをしたということ。性質たちの悪いことにおいて甲州街道の雲助は定評がある。その雲助を、あんなことを言つて罵つてしまったから、その怒り出すことは火を見るようなものです。何のためか、ここの人足は長い竹竿を横にして、それに十数人の人足がつかまつて乗物の先に立つて川を渡す、今、その竹の竿を担ぎ出して米友を引払つてしまおうとしました。

駒井能登守の一行は不意の出来事に驚いて暫らく立つて見てみると、岩の上に立つて杖を遣つかう米友の敏捷びんしょうなことに。

蟻ありのように上りかける人足を片端かたはしから突いて突き落す。寄手がいよいよ多ければ、いよいよ突き落す。裸体はだかの雲助が岩の上からバタバタと突き落されたところは、ちようど千破劍ちはやの城をせめた北条勢が、楠くすのきのためきりぎしに切岸の上から追おい落されるような

有様ですから、目をすまして見物していると、

「こいつら、俺らの懐中ふところにまだ槍の穂が蔵しまつてあることを知らねえか、今こうして手前たちを突き落しているのはこの棒だけれど、いよいよという場合には穂をつけて、ほんとうに突き殺すからそう思え、今は怪我をしねえようにそつと突いていてやるんだ、穂をつけてから、米友がほんとうに荒あばれ出したら、いちいち突き殺して、この河原を裸虫で埋めるようなことになるからそう思え。何だい、そんな長い竿なんぞを持って来やがつて、俺らを叩き落そうと言いうんだな。よしよし、そんならほんとうに棒の天辺てっぺんへ刃物をくつつけるぞ、さあこれだ、これをちやあんと棒の先へつけて槍に組み立てるように仕掛が出来てるんだ、これで突いたら命はねえんだからなそう思え、面つらの真中なかでも咽喉のどぼとけ仏でもお望み通りのところを突いてやる、ちつとやそつ

と危ねえんじやねえや」

米友が懐中から取り出した笹穂ささほは先生自身の工夫で、忽ちそれを杖の先に取りつけて、その穂を左の掌てのひらで握って下へさげ、石突いしづきをグツと上げて逆七三の構え、ちょうど岩の上に立って水を潜くぐる魚を覗ねらうような姿勢を取ると、足を払いに来た竹の竿、それを身を跳らして避けると、いま上りかけた人足の面つらの真中から血汐ちしおが溢れ出して、

「呀あッ」

仰向けに河原へ落ちる。

「野郎、仲間なかまを突きやがったな、さあ承知ができねえ」
血を見ると人足が狂う。

事態、いよいよ危険と見たから、駒井能登守の手にいた与力同心が出動せねばならなくなりました。

与力同心の出動によつてこの騒ぎは鎮しずまりました。しかし納まらなひのは雲助ども、あんな悪口を言われ、且つ面かおの真中を突かれた負傷者をさえ一人出している。五分五分の仲裁では納まりようはずがないから与力同心は、両方を押えた後に米友を番小屋の方へつれて来ました。さてその後の裁判がふるつています。

米友に槍で突かれた人足は一人。それは面を突き破られたただけで、かなり重い傷には違ひないけれど生命に別条はない。だからそれを償つぐなうために米友を片輪にしたら承知ができるだろう。しかし米友は跛足であつてもう片輪になつてゐる。この上に片輪にしてしまつては命を縮めることになるから、その代りに頭を坊主にして、それで許してやれという駒井能登守の裁判でし

た。

能登守も笑いながら裁判しました。与力同心も笑いながら、「それは御名案、どうじゃ川越しども、それで許してやれ、許してやれ、相手はこの通り正直者だから」

与力同心がこう言うのと、ハラハラしていた宿役人どももまた笑い出して、

「御支配様のお裁判だ、この男を坊主にして笑ってやれ、若い衆、それで我慢してくれ、我慢してくれ」

八方からこう言われて、さすがの川越し人足も納まりかけました。

「あはははは、この野郎を坊主にしたらドンナ坊主が出来上るだ、見たところ餓鬼がきのようでもあるし、ばかに年寄じみたところもあるし、なんだかえたいのわからねえ野郎と、つちやあ、い

いから坊主にして笑つてやれ」

「坊主、坊主」

早くも番小屋から怪しげな剃刀かみそりだの鏡台だのが担ぎ出されま
す。

米友はつまらない面かおをしています。俺を坊主にするなどとは
以てのほかだというような面をしていたが、トテモ坊主になる
ものならおとなしく坊主になってやろうというような、得心を
したようにも見られます。

物好きな宿役人が米友の後ろへ廻つて剃刀を取つたが、その
剃刀があまり切れないせいこすか、山葵卸わさびおろしで擦るようでありました。
痛さを泳こらえてじつとして剃らせている米友、その面もおかしい
が、いよいよ剃り上つた坊主もかなりおかしいと見えて、一同
でやんやと囃はやして笑つたけれど米友は笑わなかつた。

「これでいいのか」

坊主頭を振つてみて、それから例の風呂敷包を首根つ子へ結ゆわいつけて、笠を被かぶると、

「俺らは急ぎなんだ」

こう言つて横つ飛びに川の中へ飛び込んでしまいました。その拳動が、あんまり無邪気で軽快でしたから、人足どもも笑つて、米友がひとりでズンズン川を越して行くのを敢あえて止めませんでした。

この一場の小喜劇がこれで済んで、川かわむこう彼方を跛足を引き引き駈けて行く米友の形をさんざんに笑いながら、ようやく能登守一行の川渡りが済みました。しばらく遠慮をしていた兩岸の旅客もようやく渡ることができました。

「いや、旅をするときさまさまの面白いものを見るわい、駒木野

の関所で見た女、次に小仏を下りて見かけた足の早い男、今またあの奇妙な小男、さてこの次には何を見るか。それにしてもあの小男が槍を使うのは至極の精妙、見たところ、武家奉公をしている様子もなし、出し抜かれた、出し抜かれたと言つて駈けて行くが、あの調子ではまた何かおおごとにぶつかつて大事をひ惹き起さねばよいが」

駒井能登守はこういつて米友の身の上を心配しながら、やはり悠々として甲州入りの旅をつづけましたが、ほどなく鳥沢の宿へ着いてここの本陣で一休み。

三

鳥沢で休んでいるうちに、またさまざまの雑談がありました。

この附近で香魚あゆが捕れてその味が至極よろしいこと、また山葵わさびも取れること、矢坪坂やつぼざかの古戦場というのがあること、太鼓岩かいいいわ、蚕岩かいいわ、白糸の滝、長滝などの名所があるということ、それから矢坪坂の座頭ざとう転がしの難所のことになって、

「房州こみなとの小湊へ行く道にお仙せん転がしというのがあるが、ここには座頭転がしというのがある、座頭転がしとはなにか由緒ゆいしよがありそうな名じゃ、どういいうわけで、そんな名前がついたのだ」

本陣の主人が答えて、

「ただ山の中腹あに開いてあります路が、羊はらわたの腸はらわたみたようにうねっておりますから、煙草の火の借り合いができるほどのところへ行くにも廻り廻って行かねばなりません。或る時、二人の座頭が、この道を通ります時、おたがいに言葉をかけ合つて参りましたが、途中で後ろの者が『オーイ』と申します、前の

ものが『オーイ』と返事をします、近いところに聞えたものですから、真直ぐに行くと言くと谷へ落ちて死んでしまいました。それで座頭転がしというのだそうでございます」

「この街道は道が嶮しいばかりでなく、人気などもなかなか荒いようじゃ」

「人気はなかなか荒いそうでございます、どうも郡内者として、旅の者が怖れておいでなさるそうでございますが、住んでいきますれば、やっぱり同じ人間でございますから、そんなに荒っぽいとも存じません、頼むとあとへ引かないといったような片意地のところもございまして、附合い様一つでございます」

「この鳥沢に衆くめという者があるか。鳥沢の衆くめといって、この界限かいわいに知られた男があるそうな」

「へえ、鳥沢の衆、そんな者があるにはあるんですけど、

お話を申し上げるような人体にんていではございません」

と言つて、主人は鳥沢の糸のことをあんまり話したがらない。風景があつたり名物が出たりすることは多少にも自慢にもなるけれど、あんな人間の存在することはあまり名誉とも思わなからしくて、糸のことは問われても語らずに、

「なんしてもこの通りの山の中でございますから、景色と申しても名物と申しても知れたものでございますが、そのうちでも甲斐絹かいきと猿橋さるはし、これがまあ、かなり日本中へ知れ渡つたものでござりまする」

「そうだ、猿橋と甲斐絹の名は知らぬ者はあるまい、その猿橋ももう近くなつたはず」

「これから、ほんの僅かでございます、そんなに大きな橋ではございませんが、組立てが變つておりますから、日本の三奇橋

の一つだなんぞと言われております。猿橋から大月、大月には岩殿山いわとのさんの城あとがございまして、富士へおいでになるにはそこからわかれる道がございます。それから初狩はつかり、黒野田を通つて笹子峠」

本陣の主人は一通りの道案内を申しました。一行のうちにはここをしばしば通つたものもあるのだから、そんなに委くわしく言う必要はないと思つて手短かに案内をしたが、大部分は初めて甲州入りだから、珍らしがつて名所の話をします。ことに日本三奇橋の一つと称せらるる猿橋に近くなつたということが好奇心をそそつて、

「いつたい、その日本の三奇橋というのはドレとドレだ」

「周防すおうの錦帯橋きんたいぼし、木曾かへしの棧橋かきはし、それにこの甲斐の猿橋」

一行のうちの物識ものしりが答えます。やがてこの本陣を出て右の

猿橋へかかった時分に、そこで一行は、橋以外にまた奇体なものにぶつつかることになりました。

鳥沢で休んで駒井能登守の一行がまたも悠々と甲州街道を上つて行くと、ほどなく猿橋まで来かかりました。

猿橋は有名な橋。その橋のところへ来ると、往來の人が怖々と橋の左側の方ばかりを小さくなつて駈けるようにして通るから、与力同心の面々が不思議に思つて、

「ナゼ真中を通らぬ、橋がこわれているならナゼ普請をせぬ」と言つて咎めると、通りかかった男が、

「あ、あの通りでございます」

青くなつて指さしをしたから、その指さしをしたところを見ると、欄干に細引が結えつけてあつて、それから釣忍を吊したように何か吊してあるようです。何が吊してあるのかとよく見

定めると人間が一人、四ツ手に絡からんで高さ十七間の猿橋の真中から吊り下げてありました。

「こりや怪けしからん、誰がこんなことをした」

「鳥沢の親分がこういうことをやりました」

「鳥沢の親分とは何者だ」

「鳥沢の衆くめという、このあたりに聞えた親分でございます」

「何者であろうとも、斯かよう様な惨酷さんこくなことをするのを見逃してお

くのは何事じゃ、ナゼ助けてやらぬ」

「衆が申します、これを解いてやった奴があれば生かしちや置かねえとこう申しますから、正直な土地の人は慄ふるえ上つてまだ手をつける人はございません」

「憎い奴じゃ、上かみを怖れぬ仕方、早く引き上げてやれ」

与力同心は仲間小者と力を合せて、この細引にかけて吊して

あつた人間を引き上げてやりました。

引き上げてみると、もう真蒼まつさおになつて息が絶えている模様でしたから、薬をくれたり水をやったりして介抱すると幸いに息を吹き返しました。

「これ、氣を確かに持て」

「有難うございます」

「そのほう其方は何者だ、どうして斯様な目に遭つたのだ」

「どうも相済みません、なあに、ちつとばかりこつちの悪戯いたずらが過ぎたから、それでこんな目に遭つたんでございます、打捨うちちやつておいて下さいまし」

「斯様な惨酷なことを致すものを打捨ててはおけぬ、聞けば鳥沢の衆とやらいう悪者の仕業しわざじゃそうな。うむ、その衆という者はどこにいる」

「なあに、鳥沢の親分がやったんじやあございません、俺わっしが慰みにやってみたんでございます」

「さてきて、貴様はわからぬ奴じや、包まず申せ、貴様のために仇かたきを取つてやる」

「なあに、仇なんぞは取つていただかなくつてもよろしうございます、おかげさまで地獄から呼び戻されたのが何よりで、それでもう充分でございます」

「貴様はその条とやらいふ悪漢を怖れて包み隠すと見えるな、我々が聞いた以上はいかなる悪漢なりとても、後の祟たたりは少しも心配はないのじや」

「どう致しまして、たとえ条であろうとも、鬼であろうとも、後の祟りを怖がつてそれで包み隠すというようなわけじやございません、どうか打捨つてお置きなすつて下さいまし」

「貴様が白状しなければ別に調べる道もある、ともかく我々と一緒に本陣まで同道せい」

「どうか、このままお免ゆるしなすつて下さいまし、歩けません」

こんな酷ひどい目に遭わされながら何とも訴えないのは、そこに何か仔細がなければならぬと思つて与力同心の面々は、この男を引き立てようとした時に気がついたのは、この男に片腕のないことでした。

これより先、猿橋の西の詰つめの茶屋の二階で郡内織の襦どてら袍を着て、長脇差を傍に引きつけて酒を飲んでいた一人の男があらました。年は五十に近いのだが、でっぷりと太つて、額ひたいぎわ際に向う傷があつて人相けわが険しい。これは前にしばしば名前を出た鳥沢の桑という男であります。

桑は二階から障子をあげ払つて猿橋を一目にながめながら、

「どうだい、野郎をあんなにしてやった、いい心持だろう、あんなのを眺めて酒を飲むとよっぱどうめえ」

糸は猿橋の真中から、亀の子のようにが、ん、り、き、の身体を吊下げて、それを見ながら酒を飲んでいたのでありました。

「親分、どうか許して上げてください、あの人も悪いことがあるんでしようけれど、あんなにまでなさらなくつてもよろしうございます、どうか助けてやって下さい」

「いいや、いけねえ、あの野郎には、あれでもまだ身に沁しみたというところまでは行かねえんだ、もうちつと窮命きゆうめいさしてやる。

お前もよく眼をあいて見ておきねえ、なんで下を向くんだ、よ、高さは僅か三十三尋ひんとちつとばかり、下はたんとも深くねえが、やっぱり三十と三尋、甲州名代なだいの猿橋の真中にブラ下つて桂川かつらがわ見物をさせてもらうなんぞは野郎も冥利みょうりだ。お前も可愛がつた

り可愛がられたりした野郎だ、よく見ておきねえ、なにもそんな処きむすめ女みたように恥かしかつて下を向くことはねえじゃねえか」
鳥沢の糸の傍にいる女、それは女軽業の頭領のお角でありました。

「親分さん、どうか助けて上げてくださいよう、死んでしまいます、悪い人は悪い人でも、あれではあんまり酷うございますから、早く解いてやって下さいよう」

「いいや、いけねえ。お前もずいぶん、女子供を買つて来て危ねえ芸当をさせて銭をもうける職業しやうべいに似合わねえ、あのくらいしおきの仕置が見ていられねえでどうする。野郎に軽業をさせて今日はお前と俺がお客になつて見物するんだ、この棧敷さじきは買切りだから誰に遠慮もいらねえ、首尾よく野郎の芸当が勤まれば、二人の手から祝儀をくれてやらあ」

「親分、どうしても解いて上げることができなければ、いつそ殺してしまつて下さい、あんな目に会わされているより、一思いに殺されてしまつた方がよいでしょうから。わたしも見ていられないから、早く殺してやつて下さい」

「殺しちまつちやあ、身も蓋ふたもねえや、ああいう野郎にはいろいろの芸当をさせてみて、死にかかつたらまた水を吹つかけて生き返らして、またやらせるんだ。まあ、お角、一杯飲みな。俺がああの野郎をあんな目に遭わせるから、俺は鬼か魔物みたようにお前の目に見えるか知れねえが、ずいぶんああしてやつていい筋があるんだ。あの野郎の生立おいたちから国を出るまでのことを残らず知つてるのが俺だ、俺にああされてあの野郎には文句が言えねえ筋があるんだ、俺にああされたから野郎は本望ぐれえに心得ていやがるだろう、これからゆつくりその話の筋を語つて

聞かせてやるから、落着いて聞いていねえ、それを聞いているうちにはなるほどと思うこともあるだろう、俺が酔興すいきようであんな軽業をさせるんじゃないやねえと思う節ふしもあるだろう……おやおや、役人が大勢来やがったな、あ、百の野郎を引き上げたな。うむ、土地のやつら俺を憚はばかって手が着けられねえのを、木端こつぱ役人め、出しやばりやがったな、面白おもしろえ、どうするか見ていてやれ、百の野郎がなんとぬかすか聞きものだ」

駒井能登守の一行はその晩、猿橋駅の新井というのへ泊りました。が、り、き、の百は一問へ引据えて置いたが、息の絶えるほど弱っているのだから、縄をかけるまでもあるまいと、与力同心は油断をしてそのままで置きました。

「鳥沢の糸という者を呼んで、ともかくもこの男と突き合せて

見給え」

能登守は命令の形式でなく、どうでもよいことのようにこう言つて引込んでしまいました。

与力同心の連中は、ちやうど慈恵学校の生徒が解剖の屍体をあてがわれたような心持で、がんりきの再調べに着手すると共に、いわゆる鳥沢の衆なる者を引き出そうとしました。

ところが衆はただいま外出して行方が知れないという返事であつたから、更にその行方を厳きびしく詮索せんさくさせることにして、一方にはがんりきの百を三度目に引き出して調べてみました。いろいろにして泥を吐かせてみようとしたけれども、前と同じように百はいっこう口を開きません。あんな目に遭わされて、相手の罪を訴えないことがだいいち不思議であります。

「なあに、俺わつしが悪かつたんでございますから、殺されたつて仕

方がねえんでございますから」

と言つたきり。

「貴様は、たいそう足の早い奴だな」

「へえ、歩くのは達者でございます」

「貴様は片腕が無い、それはどうしたのだ」

「これは怪我をしたから、お医者さんに切ってもらつたんでご

ざいます」

「貴様は髪結渡世かみゆいとせいだと言つたが、その片腕で髪結ができるのか」

「へえ、両腕の揃つていた時分に叩き込んでありますから、まだそれが片一方の方へいくらか残つていたのでございます、けれども碌ろくな仕事はできませんからこのごろは職人任せでございます」

「貴様は身延みのぶへ参詣に行くのだと申したがその通りか」

「左様でございます。お祖師様を信心致しますから、それで身延山へ参りてえと思つて出かけて参りましたんで」

「身延の道者どうじゃならば講中こうじゅうとか連つれとかいうものがありそうなもの、一人で出て歩くというは怪けしからん」

「それが、なんでございます、俺共わつしどもは何の因果か人並みより足が早いんでございますから、講中の衆やなんかと一緒に歩いていた日にはまだるくてたまりません、それでございますから、どこへ行くにも一人でトットと出て行くんでございます」

「貴様が手形をもつておらんというのがどうしても怪しい、所、名前をもう一度そこで申してみろ」

「先にも申し上げた通り、手形を持つていたんでございますが、あの橋の真中へ吊される時に下へ落っこつてしまつたんでございます、桂川の水の中へ落してしまつたんでございます。所、

名前は山下の銀床ぎんどこの銀といつて……」

「よし、では鳥沢の衆を呼び出してからまた吟味ぎんみをする、さがれ」

一通りの調べを受けて、がんだりきの百は次の間へ下げられて
あかり
燈火もない真暗なところへ抛り込まれてしまいました。

「何だつまらねえ、猿橋を裏から見物させてもらうなんぞは、
有難いくらいなものだが、こう身体が弱ってしまったんじやど
うにもやりきれねえ、今までのお調べは通り一遍だが、これか
ら洗い立てられりや、どのみち、銀流しが剥はげるにきまつてる、
いつものがんだりきならここらで逃げ出すんだが、身体ふしおしの節々が
痛んで歩けねえ」

ひとりごと
と独言を言つてがんだりきはコロリと横になりました。

夜中になるとがんだりきの耳の傍そばで囁く声ささやくがしたから、がんだり、

き、はうとうとしていた眼を覚ました。

「百、しつかりしろ」

「兄貴か」

「野郎、また遣り損そとなつたな、いいから俺と一緒に逃げろ」

「兄貴、動けねえ」

「意気地のねえ野郎だ、さあ俺の肩につかまれ」

「俺を荷物にしちやあ兄貴、お前も動きがつくめえ、打捨うちちやつと

いってくれ」

「手前を打捨つておきやあ、俺の首も危ねえんだ、早くしろ」

「それじゃせつかくだから、お言葉に甘えて御厄介になるべえ」

「人に世話を焼かせずに、自分から動き出す気にならなくちや

いけねえ」

こうしてが、ん、り、き、を助けに来た奴と、助け出されて行くが、ん、

り、きは窓から逃げて行きました。窓を上手に切つて、身体の自由になるようにして、細引で縄梯子なわばしごがかけてあつたのを上手に脱け出したから、旅に疲れた与力同心の面々も更に気がつきませんでした。

「兄貴、よく来てくれた」

「ほんとうに世話の焼けた野郎と、つちやあ」

「どうも済まねえ」

「ははあ、今度という今度はいくらか身に沁しみたと見えて弱い音を吹き出したな」

「どうにもこうにも身体が痛んでやりきれねえ、そりやそうと、兄貴、俺がここへ捕まつてることがどうしてわかつたんだい」

「初狩はつかりまで行つたところが、通りかかる馬方の口から変なことを聞いたもんだから、それで、もしやと引返してみただい」

「そうか。兄貴の前だが、猿橋を裏から見せられたのは今度が初めてよ」

「鳥沢の糸の野郎がそうしたんだというじゃねえか。野郎あんまりふざけたことをすると思つたから、わざわざ引返して来て見ると、糸の野郎もいなけりゃあ、手前の姿も橋のまわりには見えねえから聞いてみると、これこれのわけで、役人につかまつて吟味最中ということだから、暫らく三島明神の裏に隠れて夜の更けるのを待つて、それから忍んで行つてみたんだ」

「おかげさまで命拾いをしたようなもんだが、なにぶんこんな身体が弱つていた日にや所詮遠道しよせんは利かねえ、あの役人というのが、勤番支配にちなんだから、一度はこうして助けてもらつても、あいつらに睨にらまれた上はどうもこの道中は危ねえな」

「なるほど、この様子じゃあ、どこかで二三日保養をしなくちや

あトテモ物にはならねえようだ。と言つて、勤番支配を向うに廻したんじゃあ、滅多な家へ駈込むわけにもいかず……そうだ、いいことがある、これから糸の野郎のところへ押しかけて行こう、あの野郎、この界限かいわいの親分面をして納まつているのが癩しやくだ、これから二人で押しかけて行つて、手前を預けて来ることにしようじゃねえか」

「糸の親分のところへ出直しに行くんだな。兄貴が一緒に行つてくれたら向うもマンザラな挨拶はすめえから、それじゃ、そういうことにしてもらいましょう。それから兄貴、お前が俺を出し抜いて甲府へ立たせたあの御新造と娘は、ありやあ今どこにいる」

「ははは、まだそんなことを言つてるのか。ありや今晚下初狩しもはつかりへ泊つているから明日は笹子峠へかかるんだ、あの峠が危ねえ

と思つたから、俺が附いて行くつもりであつたが、手前がこんな様子じゃあ二三日は安心ができる、二三日安心している間には甲府の城下へ一足お先に着いているから、甲府まで送り込んでしまえば、俺の肩が休まるんだ。百、お気の毒だけれど、とうとう物にならねえらしいぜ」

「ふふん、まだそう見縊みくびつたものでもねえ」

四

与力同心の面々はその翌朝になつて仰天しました。

逃げられてしまった。たかを括くくつていたために逃げられてしまった。逃げられたのよりも逃げたのが不思議であると思ひました。あんな死にかけた身体で、どうして逃げ出したか。

旅の一興で練習問題として扱われた代物しろものではあるけれども、逃げられたのは不面目である、役人の名折れにもなるから黙っているわけにはいかないとあつて、与力同心の面々は駒井能登守にこのことを申し出でて恐縮すると、

「このたびの甲州入りは、なにもあの者共を追い廻すために来たのではない、歩いてゐる間に打突ぶつかつて来たら、捉つかまえてみるがよし、逃げて行ったら逃がしておくがよし」

そこで、今までのひつかかりはいっさい断ち切つてしまつて、翌朝駒井能登守の一行は猿橋駅を立ち出でて、またも悠々として甲州道中をつづけました。

猿橋とのおえから殿上、横尾、駒橋こまばしを通つて大月へ出た時分に、

「この大きな一枚岩いわたのさんのような山、これが武田の勇将小山田備中守おやまだびつちゆうのかみが居城岩殿山、要害としても面白いが景色としても面白い。備

中守信茂はたしかこの城で二度の勇氣を現わしているようだ。
一度は村上義清の手から逆襲された時、五十余人でこれを守つて守り通してその間に信玄の援兵が来た。二度は武田の末路の時、織田の兵をここで引受けて備中守が斬死した。武田家にはさすがに勇士がある、天険がある、この天険あり勇士あつてついに亡びたのは天運ぜひもなし」

「いかにも、武田家の武略には東照権現も心から敬服しておられた。徳川家の世になつて甲州の仕法は、いっさい信玄の為し置かれたままを襲用して差支えなしということであつたが、ただ一つ、甲州の軍勢が用いた毒矢だけは使用相成らずと東照権現のお声がかかりであつた。信玄は毒矢を平気で用いておられたが東照公はそれをお嫌いなされた、そこに両將の器量の相違がある」

「信玄公は、智略において第一、惜しいことに人情に乏しい、民を治めることおさは上手であつたにかかわらず、その徳が二代に及ばず、その術が甲斐信濃以上に出づることができなかつた。越後の上杉謙信はそれに比べると勇氣第一、それとても北国を切り従えたのみで上洛の望みは遂げず、次に織田右大臣、よく大業を為し得たけれど、その身は非業ひしうの死。豊臣太閤に至つて前代未聞ぜんだいまもんの盛事。それもはや浪花なになの夢と消えて、世は徳川に至りて流れも長く治まる。剛強必ず死して仁義王じんぎたりという本文を目のあたりに見るようじゃ」

例によつて官用だか名所見物だかわからないような調子で歩いて行きました。

駒井能登守のつれて来た与力同心は、大抵若い連中でありました。なかに老巧者もないことはないが、話の中心になるの

は若い連中であつたから、ややもすれば批評が出たり、議論が出たりします。

「何といつても信玄と謙信の食い合いが戦国時代ではいちばん力の入つた相撲だ。すべて相撲は段違いでは面白くないし、そうかといつて同じ型の相撲が力ずくで揉み合うのも面白くない、そこへゆくと謙信の勇に信玄の智、義を重んずる謙信と、老獺ろうかいな信玄と、型が違つて互角なのが虚々実々と火花を散らして戦うところは古今の観物みものだ。まあ、あんな相撲はおそらく日本の戦争に二つとはあるまいな、戦国の時代ではまさにあれが両大関だ」

「それはそうに違いない、川中島の掛引かけひきは軍記で読んでも人を唸うならせる、実際に見ておいたら、どのくらい学問になつたか知れぬ。我々は不幸にしてその時代に遭あわなかつたことを憾うらむく

らしいものだが、しかしなお遺憾なことは、あの両大関を空しく甲斐と越後の片隅に取組ましてしまつて、本場所へ出して後から出た横綱と噛み合わせてみなかつたことが残念だな」

「それは誰でもそう思う、信玄と謙信が、もう少し長生ながいきをしていたら、トテモ信長公が天下を取るわけにはゆかぬ、信長公が世に出なければ太閤というものも世に出るわけにはゆかぬ、太閤が出なければ日本の歴史がまたどんなふうになつていたか見当がつかぬ。それを考えると、信玄、謙信という人たちの日本の歴史上の潜勢力もまた大きなものと言わねばならぬ」

「しかし、実際の力はどうかであつたらう、信玄や謙信が果して信長や太閤や東照公と戦つて、それを倒し得たであろうか。それらの人たちも、小競合こぜりあいはしたけれども、本場所で晴れの勝負をしたことはないから、ほんとうのところはいずれが勝まさりいず

れが劣ると判断はつけられまい」

「そりやわかりきった問題だ、謙信に対する信長は、いつも勝味かちみがなかった、謙信は信長を呑みきっていた、信長はたえず威圧されて怖れていた、謙信が、いで北国人の手並を見せてくれんと、まさに兵を率いて京都へ来たらんとする時、信長は蒼くなつて慄ふるえ上つた、ちようどその京都へ出ようとする途端に謙信が病気で死んだ時は、信長はホツと息をついて、手に持っていた箸はしを抛り出したというではないか」

「それはそうであつたかも知らぬ、それを事実とすれば信長というものがあまりに弱い、少なくとも木下藤吉郎を家来に持つていた信長、味方の全軍が覆没しても驚かず、桶狭間おけはざまで泰然としていた信長、たとえ一目もくなり二目なり置いていたとはいえ、そう無惨むざんな敗れを取るようなこともなかつたろうと思う」

「どうして、今川義元や斎藤道三どうさん、或いは浅井朝倉あたりとは相手が違う、謙信がああ勢いでもって、北国から雪崩なだれの如く一瀉千里で下つて来て見給え、木下藤吉郎なんぞも、まだ芽生めばえのうちには押しつぶされて安土あづちの城が粉のようになって飛ぶ。謙信をもう少し生かしておいて、あの勝負だけはやらせてみたかった」

「ところで、そうになると、武田信玄が黙つて見てはいない。信玄と謙信とは、今いう通り型が違つて力は互角であつたけれども、気位の上では信玄は謙信を白い眼で見っていたようなところがあるわい。謙信を都へ上せて織田と噛み合わせたそのあとで、ねちりねちりと道草を食つて腹を太らせながら乗り込んで行くという、しぶとい芸当をやるのがこの入道だ。不幸にしてその時は、あんまり坊主の当り年でなかつたと見え、武田入道が亡くなる間もなく上杉入道がなくなつた」

「謙信が死んで悦よろこんだのは織田公だが、信玄が亡くなつて運が開けたのは家康公だ、謙信あるうちは信長公の志は遂げられなかつたように、信玄存する間、家康公も実際手も足も出せなかつた御様子だ」

「しかし、信長公も家康公も、信玄、謙信とはともかくも手合せをしておられるけれど、太閤だけは、ついぞ張り合つてみたことがないようでござるが、あの太閤の軍いくさぶりと、信玄、謙信あたりと掛け合わせてみたらどんなものであつたらう。信玄、謙信に向つては織田公も家康公も二目も三目も置いたような軍いくさぶりをしておられたが、太閤ならばどんなものであつたらうか知ら」

「それは手合せがなかつただけに面白い見立みたちにはなる。後に太閤の世になつてから、太閤がこの甲州へ来て、信玄の木像を叩いていうことには、お前も早く死んで仕合せな坊さんだ、いま

生きていたならばおれの馬の先に立つて、下座げざ触ふれをするようなことになるのだと言つて笑つたそうだが、太閤の眼から見ると、そんなものであつたかも知れない」

「いや、太閤という人は、派手師はでしで人気を取るのが上手、いつもそんなことを言つて人を慥しやうふく伏させるのだが、信玄とても、それほどやすくはない。現に太閤なども家康公の弓矢には閉口しておられた、その家康公を苦しめたほどの信玄だから、太閤のよくな派手師にとつては、謙信よりも信玄の方が苦手かも知れぬ」
こんな話をして小山田備中の城、岩殿山の前をめぐりながら進んで行く。

「この城によつて反そむいたものがあるから、勝頼が天目山にちぢまつて最期さいごを遂げることになつてしまつたということじゃ。小山田備中は果して忠臣であり、勇士であつたらうか知らん。と

にもかくにも要害は要害じや」

大月を過ぎて初狩、立川原たてかわら、白野しらから阿弥陀街道あみだを練つて行く。

「山国とは言いながら、どつちを見ても山ばかり、よくもこう山があつたものじや。岩殿山が要害なばかりではない、甲州全体が一つの要害じや、小仏なり、笹子なりに兵を置けば、いかなる大軍も攻め入る手段てだてはなからう、一夫これを守れば万卒も越え難しというのはまさにこれじや。東の方はこれで、南はまた富士川口があるばかり、西と北とは山また山、信玄も豪えらかつたには相違ないが、この要害で守るに易く攻めるに難い地の理がよろしい。およそ四海に事を為す能わざる時に、この山国に立籠たてこもつて天下の勢せいを引受けてみるも一興ではないか」

「左様な要害なればこそ、この国が天領であつて、柳沢甲斐守以

外には封ほうを受けたものが一人も無い。まんいち江戸城に事起つた時は、この城がいかなるお役に立つやも計り難し。そうなる
と我々の勤めもまた重い」

阿弥陀街道を過ぎると黒野田の宿しゅく、ここは笹子峠の東の麓で本陣があります。日脚ひあしはまだ高いけれど、明日は笹子峠の難所を越えるのだから、今夜はここへ泊ることになりました。

この黒野田へ泊ったものは駒井能登守の一行ばかりではありませんでした。本陣へは先触さきふれがあつて能登守の一行が占領してしまつたけれど、林屋慶蔵というのと、殿村茂助という二軒の宿屋にも少なからぬ客が泊っていました。

笹子峠を下つて来た客もこの黒野田で宿を取る。笹子峠へ上ろうとする旅人もここで泊つて翌日立とうとするのだから、自然に足を留める。それに今日は勤番支配の一行が入り込んだか

ら、この小さな山間の小駅が人を以て溢あふれるという景気になつてしまいました。

駒井能登守の一行が本陣へ着いてしまつてから、少しばかりたつてこの宿へ入り込んで来た二挺の駕籠がありました。駕籠の中は何者だか知れないが、その傍に附いているのが例の米友であることによつて大抵は想像されましよう。幸いにして米友は託された人の乗物に追いつくことができたらしい。

五

と、
二つの駕籠の宿しゆくの休所へ駕籠を下ろして本陣へ掛合いにやる

「今晚は御支配様のお泊りでございますから」

と言つて、余儀なく謝絶ことわられてしまいました。林屋というのと殿村というのと、そのいずれも満員です。満員でないまでもその空間あきまというのは到底、この乗物の客を満足させることができないものばかりでしたから、さてここへ来て途方に暮れ、

「弱つたな」

米友が弱音を吹きました。

「兄さん」

駕籠の中から垂たれを上げて、米友を呼びかけたのはお絹でありました。

「何だ」

「この本陣に泊っている御支配様というのは、何というお方だか聞いてみて下さい」

「おい、茶店のおじさん、本陣に泊っている御支配というのは

何というお方だか知っているかい」

「へえ、それはこのたび、甲府の勤番御支配で御入国になりま
する駒井能登守様と申しまするお方でございます」

「御新造さん、お聞きなざる通り駒井能登守というお方だそう
でございますよ」

「駒井能登守……その方ならば、わたしが少し知っている」
とお絹が言いました。

「兄さん、おまえ御苦労だが、その駒井の殿様へ掛合いに行つ
てくれないか」

「俺おいらが掛合いに行つたところで……」

米友はさすがに躊躇ちゆうちよします。米友もそういう掛合いに適任で
ないことを自覚しているのです。槍を取つてこそ宇治山田の米
友だけでも、大名旗本を相手に掛がら合いをする柄でないことを

知っているから、それで尻込みをしたがると、

「もと四谷の伝馬町にいた神尾主膳からの使でございませうと言つてござらん、そうして主人の勤め先の甲府へ参る途中でございませうが、女ばかりで泊るところに困つておりますからと、事情を話して頼んでござらん。いいかえ、いつものようにポンポン言つてしまつてはいけませんよ、丁寧に言つて頼まなけりやいけませんよ。と言つてもお前さんのことだから何を言い出すかわからない。それではわたしが手紙を書きましょう、手紙を書いて駒井様宛にお頼み申してみましよう、お前さんはその手紙だけ持つて行つて、お返事を伺つて来ればよいことにしましよう」
と言つてお絹は駕籠から出て、休茶屋で手紙を書いて封をしました。

駒井能登守は黒野田の本陣へ着いて休息していると、

「申し上げます、ただいま四谷伝馬町の神尾主膳様のお使と申しまして、この手紙を持参致しました」

「ナニ、神尾の手紙？」

能登守は、少々意外に思つて取次の手からその手紙を受取つて見ると女文字でありました。

「甲府詰の主人神尾方へ参る途中の者、女連おんなづれにて宿に困る……はあ、なるほど」

能登守は早速その手紙を捲き納めながら、

「主人を呼ぶように」

本陣の主人が急いで出向いて来て、遠くの方から頭を下げました。

「お召しでございましたか」

「当家には我々のほかにも客があるであらうな」

と能登守が尋ねました。

「どう致しまして、御支配様のお着きと承り、ほかのお客はみんなお断わり申し上げて、近所の宿屋へ頼みましてございませう、御支配様のお連れのほかには決してどなたもお泊め申しは致しません」

「それは困る、我々が通るのにそんなことをしてもらつては人も迷惑する、自分も迷惑する、泊りたい者には部屋の空あいている限り泊めてやらなくてはならぬ」

「恐れ入ります」

「今、斯か様な手紙を持たせてよこした者がある、女連で宿がなくて困却すると書いてある、急いで泊めるようにしてもらいたい」
「恐れ入りました、お言葉に甘えましてそのように取計らいを致します」

主人は畏^{かしこ}まつて出て行きました。

まもなく本陣の主人が迎えに行つて、そうしてお絹の一行を案内して来ました。米友もまたお絹一行について案内されて来ました。お絹の一行といつても、それは米友のほかにはお松があるばかりでした。お絹は例の通り町家の奥様のようななりをしていました。お松は御^{ごしゅでん}守殿風をしていました。

この二人が駕籠から出た時には、さすがに泊っている人の目を驚かせました。与力同心の面々なども、この思いがけないあい宿^{やど}の客の奥へ通るのを目を澄ましていろいろに噂の種^まが蒔かれました。あれは能登守殿の親戚の者だろうと言う者もありました。いや御支配の夫人……にしては少し老^ふけている——といふものもありました。江戸から連れて来たのでは人目もうるさいし、人の口もあるから、わざと道中を別にして、この辺で落

ち合う手筈で来たのだらうと考えるものもありました。そんなはずはないというものもありました。能登守はそういう性質たちの人ではないと弁護をするものもありました。

甲州道中で、山を見たり雲助を見たりしていた眼で、二人の女を見たから、目を驚かせることがよけいに大きかったと見えて、暫らくはその噂で持切りでした。そうして結局は、その何者であるかを突留めなければならぬ義務があるように力瘤ちからこぶを入れたものもありました。けれどもこの水々しい年増と美しい娘とが奥へ通ったあとで、一同は吹き出さなければならぬことに出会でっくわしてしまいました。

それは二人につづいて米友がのこのこと入って来たからであります。笠を取るまではそんなに眼につかなかったけれども、笠を取って見ると米友の剃立そりたての頭が、異彩を放っていること

がよくわかるのであります。剃立てといえは、青々としてツルツルしたように考えられるけれど、米友のはよく切れない剃刀かみそりで削けずったのだから、なかなかテラテラ光るといふわけにはゆかないのです。ところどころに削り残された鉋屑かんなくずが残っているのです。けれども当人は、やむを得ないような面かおをして二人につづいて上り込んで来たから、誰もそれを見て吹き出さないわけにはゆきませんでした。

「兄さん、お前の頭を見て皆さんが笑っていますよ」

お絹は振返つて米友の頭を見て、自分もおかしくなつて口を袖で隠しました。

「でも家の中で笠を被かぶるわけにはいかねえ」

といつて米友が不平な面をしましたから、お松はそれがまたおかしくつて笑いました。

能登守の一行は「なるほど、こいつだな」と思いました。昨日、鶴川での出来事を知っているだけによけいにおかしくなります。

「生え揃うはまで頭巾そろでも被ずきんつていたらいいでしょう」

「鶴川の雲助の野郎が、こんなにしやがった、ほんとに憎らしい野郎共だ」

米友は口の中でブツブツ言つて、自分の頭をこんなにした雲助どもを呪のろいます。

米友は、お絹とお松とがいる次の部屋へ陣取り、お絹お松の部屋と中庭を隔へだてたところがすなわち駒井能登守の部屋であります。

お絹は取敢えず御都合を伺つた上で、能登守のところへお礼を申し上げに行つてきました。

能登守は快くお絹と対談して女連の道中を慰めたりなどしました。駒井の許を辞して帰ってからお絹の胸には、駒井能登守を対照としての一つの心持が浮びました。

甲府へ行けばこの人は、自分の元の主人の神尾主膳の上へ立つ人だと思いました。同じ旗本でありながら、一方は支配する人、一方は支配される人とお絹は思いました。

そうして、自分よりも年が若いし、神尾よりもまた若い駒井能登守の幅が利くのかと思うと憎らしくなりました。なんとかしてやりたいという気になりました。

お絹の思うには、けつきよく男は脆いものであるということでした。まだ三十前後の能登守、たとえば相当の学問や才気があったところで知れたものである。固いということは、女に接する機会がない間に限ったことで、相当の手練を以てすれば、男は

必ず色に落ちて来るものである。固いようなものほど落ちはじめたら速度が強いということが、お絹の日頃から持っている信念でありました。だから駒井能登守が、いま甲州道中を、飛ぶ鳥を落す勢いで練って行く時に、これをどうにかしてやりたいということとは結局、お絹が持っている唯一の信念から出立するということに帰着しますので、大へんやかましいことです。

駒井能登守に会ってお礼を言ってから、そんな心持を起してお絹は自分の部屋へ帰って来て、

「お松や」

「はい」

お松は静粛しとやかに返事をしました。

「お前は後程お茶を立てて駒井の殿様に差上げておいでなさい、それから、まだお風呂がお済みにならぬ御様子だから、お前は

殿様のお伴ともを申し上げてお風呂のお世話を申し上げねばなりませんぬ。こんな山家やまがのことで、氣の利いた女中はいないし、ああして殿方が女気なしの旅をしておいでなさるのは、何かにつけて御不自由でいらつしやるし、こうして今夜も私たちが安心して宿へ着くことのできたは、みんなあの殿様のおかげ、それにあのお方は甲府の勤番支配といつて、うちの殿様よりはズット上席のお方、神尾の殿様はあれだけのお方だけれど、この駒井の殿様はこれからお大名になるか御老中になるか、出世の知れないお方」

お絹は、こう言つてお松を説きました。お松はいちいちそれを聞いていましたけれど本意でないことがいくらもあります。自分の甲府へ行こうというのは、神尾の殿様だとか、駒井の御支配様だとかいうお方のお氣に入られようと思つて来たはずで

はないけれど、ともかくもこの場合、一通りの御用と御挨拶はつとめねばなるまいと思ひました。好意を持つてくれた目上の人に対する礼儀という心から、そうせねばならないものかと思ひました。

六

駒井能登守はこうしていても、毎日宿へ着くと、書類を調べたり手紙を認め^{したた}たりすることではほとんど暇がありません。

書類の多くは公用のもの、手紙は公用と私用とが相半^{あいな}するくらいでありました。それらを一通り処理してしまつたあとで、能登守が興味を以て書く手紙が一つありました。

「今日は笹子峠の麓なる黒野田といふ処に泊り申候、明日笹子

峠へかかる都合に御座候、これより峠を越えて峠向ふの駒飼こまかひといふ処まで二里八丁の道に候、小仏峠と共に此の街道中でこぶの難所に候、笹子を越え候はば程なく勝沼にて、それより甲府までは一足に候、さすがに峽かひと申すだけの事はありて、中々難渋な山道に候へども一同皆々元氣にて、名所古蹟などを訪らひつつ物見遊山ものみゆざんのやうな心持にて旅をつづけ居り候、また人事にも面白き事多く、土地の名物や風俗などにも少しく変つた事有之候、言葉もまた江戸より入り候へば甲州特有の言葉ありて面白く覚え候、昨日はまた甲州名代なだいの猿橋といふのを通り申候、これは名所絵などにて御身も御承知の事と存じ候へ共、猿が双方より手を延ばしたるやうの形にて、土地の人は橋より水際まで三十三尋ひろ、水際より水底まで三十三尋も有之候様に申し居り候処、その間に一本の柱も無く組立て候

事が奇妙に御座候、甲州は評判の如く荒き処あり、途中も心して見聞致し居り候。

さて御身の御病気は如何に候や、われら斯くの如き愉快なる旅をつづけ居り候うちにも常に心にかかり候はこの事のみ候、追々寒さにも向ひ候べく、一しほお厭いとひなざるべく候、昨日受取り申候たよりによれば少しく快方との事、やや安心は致し候へども、甲府入りを致したしとは以ての外に候、少々快方に向ひたればとて心に弛ゆるみを生じてはならず候、再三申し候通り此の道は男子も憚る險道、それを女の身にて、殊に病中の身にて旅立たんなどは想ひも及ばぬ事に候、左様の心を起さず当分は御静養專一なざるべくそに可被成候、冬を越して来春身体と共に陽気の回復する頃を待ちて御入国なされ候へ。

今日も女連の二人の者同じく江戸より出でて甲府へ赴く由

にて此の宿へ着き申候、御身が甲府入りを致したしとの書状
と思ひ合せてをかしく存じ候、右の婦人達もたえず駕籠乗物
に揺られ、人氣の険しさに胆きもを冷し随分難渋のやうに見受け
られ笑止に存候」

駒井能登守には奥方があるのでした。それはこの手紙によつ
ても察することができるようになり重い病気、かなり永い患わづら
いにかかつて江戸に残されているのです。その奥方に宛てて能
登守が毎日のように手紙を書いては送り、奥方からもまたこの
道中の都度つど都度つどに音信のあることがわかります。能登守も若い
から奥方も若いに違いない。能登守も綺麗な人だから奥方も美
しい人に相違ない。若くて美しい二人は結婚して、そんなに長
い間でないこともわかっています。新婚の若い男と女、たとえ
お役目柄いがかの厳めしい能登守にも情愛がなければならぬはずであ

ります。ましてや奥方にはそれに一層の深い情愛がなければならぬはずであります。重い病氣と、永い患いとが二人の中を隔てました。その隔てはこうして毎日のように書いているおたがいの消息によつて、美しく結ばれているということが想像されるのであります。

駒井能登守が手紙を書き終つたところへ、お絹から言いつけられた通りにお松がお茶を捧げて入つて来ました。

「御免あそばしませ」

「これはこれは」

と能登守は言いました。

能登守は風呂に入る前に、書類や手紙の用を済ましてしまうのが例であります。お松がお茶を捧げて来たのはちょうどよい折でありました。

能登守は、お茶を捧げて来たお松の様子を見ると、どうもこの宿あたりにいる女中とは思われないから、

「そなたは、この家の娘御むすめごか」

と言つて尋ねてみました。

「さきほどは伯母が上りましてお目通りを致しました」

「あ、左様であつたか」

宿を周旋してやったためにお礼に来たさきほどの女、この娘はその連つれか、そうしてさきほどの女が氣を利かして、この娘にお茶を持たしてよこしたのだらうと思ひ当りました。

「何ぞ、御用がござりましたなら、仰おおせつけ下さるやうにとの伯母の申しつけでござりまする」

と言つて、お松は能登守の前に指を突きました。

「それは御親切ありがたいが、別に用事といつて……」

能登守はちようど眼を落したのが、いま書いていた手紙であります。せつかくのことに、

「大儀ながらこの手紙を、明朝の飛脚で江戸へ届けてもらうように、この宿の主人へ手渡し下されたい」

と言つて、その手紙を拾つてお松に渡しました。

「^{かしこ}畏まりました」

「あの先刻の婦人は、そなたの伯母でありましたか」

「はい」

「よろしく申して下さいよ」

お松はこうしてお茶を捧げて来て、手紙を持って能登守の許をさがる時に、まことに好い殿様だと思ひました。怖^{こわ}いお役人様のお頭^{かしら}であろうと思つて来たのに、打つて変つて優^{やさ}しく思ひやりがありそうで、そうかと言つてニヤけた御^ご人^{にん}体^{てい}は少しもな

く、気品の勝すぐれていることを何となく奥床おくゆかしく感じてしまいましたが。

お絹はお松が能登守から頼まれたという手紙を自分が受取つて、お松に向つては、

「今、殿様がお風呂においでであるそばしたようだから、お前は行つてお世話を申し上げて下さい、失礼のないように」と言いつけました。

お松はその言いつけをも、温和おとなしく聞いて風呂場の方へ行きました。そのあとでお絹は能登守の手紙を手にとつてつくづくと眺めていました。表には「江戸麴町二番地、駒井能登守内へ」と立派な手蹟ししたたで認めてあります。

それを見ると、お絹はまたむらむらと変な心が起りました。この手紙は能登守からその可愛い奥方に送る手紙だと感づいて

みると、お絹の心が穏やかであります。能登守の奥方にはまだお目にかかったことはないけれど、能登守があを通り若くて綺麗な人だから、奥方もまた若くて美しい人に違いないとは誰でも想像されることでもあります。そういうことにはことに敏感なこの女は、あんまり人をばかにしているところ思いました。お安くない夫婦の間の音信をこのわたしたちに見せつける能登守の仕打しうちを憎いと思いました。能登守のような若い殿様に可愛がられる奥方は、どんな人か面かおが見てやりたいたいように思いました。自分たちにそういう心を起させようがために、お松に頼まないでもよい手紙をワザと持たしてよこして、これ見よがしに見せびらかすのではないか。

これは能登守にとつては非常に迷惑な邪推であります。

「よしよし、そういうわけならばこの手紙の中を見てやりましよ

う。どんな憎らしいことが書いてあるか見てやりましょう、ほんとに癩しやくに触るから見てやりましょう」

お絹もそれほど悪い女ではないけれど、情事にかけて、いつも好奇心がいたずらをします。そのいたずらだが、暗い中でうごめき出すのを抑えきれないという悪い癖がありました。

それでも女のこと、荒らかに封を切るということはなく、楊枝ようじの先で克明こくめいに封じ目をほどいて、手紙の中の文言もんごんを読んでみると、それがいよいよいやな感じを起させてしまいました。

この手紙の中は夫婦間の美しい消息を以て満たされている。遠く旅に行く夫の心と、病んで家に残る妻の心との床しい思いやりが溢れています。その美しい消息と床しい思いやりとが、お絹の心持をさんざんに悪くしてしまいました。

人の手紙というものは、見るべきものでも見せるべきもので

もないのに、それを盗んで見るということはこの上もない卑劣なことで、お絹もそこまで墮落した女ではなかったのだけれど、ものずき好奇から出立して、我を失うようになるのは浅ましいことであります。

その手紙を読んでしまったあとでお絹は、ついにその筆蹟をうつすといたるところまで進んで来ました。駒井能登守の筆蹟を透すきうつしにして取つてしまいました。これはどういうつもりか知らん。さすがにそれからあとを破りもしなければ裂きもしないで、もとのように丁寧ていねいに封をします。

好奇の隣りには、いつでも罪悪が住んでいる。物を弄もてあそぼうと思えば必ず己おのれが弄ばれる。お絹は悪い計画をする女ではないにかかわらず、男を見るとこういいたずら心が起つて、兵馬を口説くどいてみたり、竜之助の時の留女とめおんなに出てみたり、が、ん、り、き、

を調戲からかつたりしていたのが、ここへ来ると駒井能登守を、また相手にする気になつてしまいました。

能登守の手紙を見てしまったことが何か能登守の弱点を押えたように思われて、その取つておいた筆蹟から、或いは能登守を困らせてやるようないたずらができまいものでもあるまいと思つていました。

「友さん、友さん」

お絹は次の間に控えている米友を呼びましたけれども返事がありませんから、

「どうしたんだらう、疲れて寝込んでしまったのかしら」

と独言ひとりごとを言つている時に、与力同心の部屋に宛あてられたところどつで哄どつと人の笑う声がしました。それと共に、

「笑つちやいけねえ」

という声は米友の声であります。

「もうお役人衆の傍へ行つて話し込んでいると見える。罪のない人だけれど、また間違いを起さなければよいが」

大勢を相手にしきりに話し込んでいる米友を呼び出すも気の毒だと思つて、お絹は自分でその手紙を主人のところへ持つて行こうとして廊下へ出ました。

お絹が廊下へ出て見ると、あの部屋の障子には幾多の侍の頭と米友の頭がうつつて見えます。障子に映つてさえ米友の頭はおかしい頭でありました。よくあの頭で人中へ出られるものだ、せめて頭巾でも被つて出るか、そうでなければ、かなり頭の毛が生え揃うまで人中へ出ないようにならなければ、かたがた思いました。ところが米友はいつこう平気で、

「一生稽古したつて駄目な奴は駄目なんだ、俺おいらなんぞは木下

流の槍の手筋を三日しか稽古しねえんだ、木下流とも言えは淡路流とも言うんだ、三日稽古をしてその秘伝こつをすっかり呑込んでしまつたんだ」

何を言つてるのかと思えば、槍の自慢でありました。与力同心の連中へ、坊主頭を振り立てて、槍の自慢をしていることがありありとわかります。

与力同心の連中は、一人の米友を真中へ取りまいて、いずれも面白半分な面かおをしてその話を聞いているところでもあります。

面白半分な面をして聞いているのはまだ真面目まじめな方で、米友がこの部屋へ入つて来る早々から笑いこけて、いまだにゲラゲラ笑つているものもあります。もう腹の皮を痛くしてしまつて、このうえ笑えないで苦しがつているようなものもあります。

これは米友が好んでここへ押しかけて来たものではありません。

彼等は早くもこの宿へ米友が来たということを知つて、相当の礼を以て招いたから米友はここへ来たのでありました。まね

与力同心は、米友の頭を見て笑つてやろうというような心で米友を招いたのではなく、この不思議な人物の持つてゐる、不思議な能力を解決してみたいからでありました。

しかしながら、招かれて来た米友の頭を見た時は哄どっと笑つてしまいました。人を招いておきながら、その人の入つて来るのを見て、声を合せて笑い出すということとは礼儀ではありませんけれども、つい笑つてしまいました。しかし笑われても米友は必ずしも腹を立てませんでした。

「笑つちやいけねえ」

と言つて座に着いてから、やがて話が槍のことまで及んで来て、「一生稽古したつて駄目な奴は駄目なんだ、俺らなんぞは木下

流の槍の手筋を三日しか稽古しねえんだ、木下流とも言えは淡路流とも言うんだ、三日稽古をしてその秘伝こつをすっかり呑込んでしまつたんだ」
という気焰を上げています。

七

お絹が手紙を持ち扱い、米友が与力同心の中で気焰を吐いている間に、お松は風呂場で駒井能登守の世話をしておりました。お松は次の間に控えて、能登守の風呂から上るのを待つています。

その間に兵馬のことを考えています。いま甲府の牢内に囚とらわれているという兵馬を助けんがためには、神尾主膳に頼ること

が最良の道であることに七兵衛もお絹も一致しているが、お松には神尾の殿様という人が、それほど頼みになる人とは思われません。ここにおいでなさる駒井能登守という殿様は、神尾の殿様よりも一層頼みになりそうな殿様であると、こう思わないわけにはゆきません。甲府勤番支配は、ある意味において、甲州の国主大名と同じことだと言ってお絹から聞かされました。神尾の殿様に比べて強大な権力を持っている人だということもお絹から聞かされました。その上に、ちよつとお目にかかっただけでも、大層お優しい方だとお松は頼もしく思いました。神尾の殿様とは、以前の知行高は同じぐらいであったそうだけれども、その人品は大へんな相違があると思いました。それですから、もし神尾の殿様に願つて通らなかつた時は、この殿様に願えば必ず叶かなえて下さるだろうと思われてなりませんでした。

或いは神尾の殿様に願わない前に、この殿様にお問い合わせした方が、事がすんなりと運ぶだろうと、お松はそこまで考えてきました。それでこの殿様に、この意味で取入っておくことが幸いであると気がつきました。お絹がお松をして能登守に取入らせようという心と、お松が自身で能登守を頼ろうとする心とは全く別なのであります。

そう考えてくると、お松はこの時が好い機会であると思わな
いわけにもゆきませんでした。同じ甲府へ行く旅にしても、身
分も違えば目的も違う、この後、こんなに親しくお目にかかれ
る機会があるかどうかわからぬとお松はそこへ気がついたから、
どうしても今宵を過こよいごさず能登守に向って、兵馬の身の上のお
願いをしてみるほかはないと、心が少しいらだつようになりま
した。

こんなことを考えている時に、能登守は風呂から上った様子でありましたから、お松は立つて行きました。そうしてお松は、能登守の着物を着替える世話をしてやりました。能登守はお松の親切を喜んで、打解けて見えます。

お松は言い出そう、言い出そうとしましたけれども、つい言い出しにくくなって、お願いがございませと咽喉まで出てそれが言えないで、自分ながら気がいらだつのみであります。

お松が能登守のために雪洞ぼんぼりを捧げて長い廊下を渡って行く時に、笹子峠の上へ鎌のような月がかかっているのが見えました。能登守は静かに廊下を歩きながら、その月を振仰いで見ました。

「そなたは、江戸からこんなところへ来て淋しいとは思わないか」

と能登守はお松を顧みてかえりこう言つてくれました。その言葉があつたために、さつきから一生懸命で、言い出そう言い出そうとしていたお松は一時に力を得て、

「いいえ、淋しいとは思ひませぬ、少しも」

と言葉にも力を入れて返事をしました。

「それはえらい」

と言つて、能登守は賞めたけれど、お松の言葉よりは鎌のような月の方に見み惚とれているのでありました。

「殿様」

お松はここでせいっぱいに殿様といつて能登守を呼びかけましたけれど、自分ながらその言葉の顫ふるえていることに驚いたくらいでありました。

「なに？」

能登守は、お松の改まった様子を少しく気に留めた様子です。

「あの、お願いでござりまする。」

とお松は、いよいよ改まった言葉でありました。

「願いととは？」

能登守は鎌のような月を見ていた眼を、お松の方へ向けました。そうして雪洞ぼんぼりの光に照らされたお松かおの面に一生懸命の色が映っていることを認めて、これには仔細しさいがあるだろうと感じました。

「あの、わたくしどもが甲府へ参りまするのは、冤むじつの罪で牢屋につながれている人を助けに参るのでございます。」

「人を助けに？」

「それ故、殿様のお力添えをお願い致したのでござりまする。」
お松は夢中になってここまで言ってしまうました。ここまで

言つてしまえばともかくも安心と、ホツと息をつきました。

「果して冤むじつの罪であるものならば、わしの力を借りるまでもなく罪は赦ゆるされる。もし、まことに罪があるものならば、わしが力添えをしたとてどうにもなるものではない」

と能登守は、お松の願いの筋には深く触れないで、やや慰め面がおにこう言つただけでした。しかしお松はもう、一旦切り出した勇氣がついたから、その頼みの綱を外はずすようなことはしません。

「いいえ、たしかに冤むじつの罪なのでございます、その方は決して盗みなどをなさる方ではないのでございます、公儀様の御金蔵を破るなどという、だいそれたことをなさるお方でないことは、わたしが命にかけてもお請合うけあいを致いたします、それがあらぬお疑いのためにただいま御牢内に繋つながれておいであそばす故、わたくしは心配でなりません、何卒してそのお方をお助け申し

上げたいと、それでわたくしどもは甲府へ参りますのでござりまする、甲府へ参りまして、神尾主膳様からそのお願いを致すつもりでございますが……」

お松は一息にこれだけを言つてしまいました。能登守は、お松の願うほど熱心にそれを聞いたのか聞かないのか知らないけれど、笹子峠の上にかかった鎌のような月にばかり見惚れていたのであります。

そのうちに廊下を渡り了つて、おわ能登守の居間の近くまで来ました。

八

お松が帰つて来た時分に、お絹のいなかったことは別に怪し

いことではありません。

お絹は風呂から出ると、浴衣ゆかたを引っかけたままで暫く溪流に臨んで湯上りの肌を、山岳の空気に打たせていました。

前にいう通り、すぐ眼の上なる笹子峠には鎌のような月がかつてゐる。四方の山は桶おけを立てたようで、桂川へ落ちる笹川の溪流そうそうが淙々として縁の下を流れています。

自分にいい寄つて来る男を物の数とも思わないような気位が、年と共に薄らいでゆくことが、自分ながらよくよくわかります。それ故にが、ん、り、き、と、お角とが仲よくして歩くところを見ると嫉やけて仕方がありませんでした。

ありてい有体に言えば今のお絹は、男が欲しくて欲しくてたまらないのであります。男でさえあれば、どんな男でも相手にするというほどに荒すさんでくることが、このごろでもたえず起つて来るよ

うでありました。

「あの、が、ん、り、き、の百蔵という男、御苦労さまにわたしたちを
附けねら覗つてこの甲州へ追おっか蒐けて来たが、あの猿橋で、土地の親
分とやらに捉まつて酷い目にあつたそうなの、ほんとにお気の毒
な話」

とお絹は、が、ん、り、き、のことと、それが猿橋へ吊されたという話
を思い出して、ほほ笑み、

「七兵衛が助けると言つて出かけたが、ほんとに助かつたか知
ら。酔興とは言いながら、かわいそうのような心持がする、何
のつもりか知らないけれど、わたしを追蒐けて来たと思えば、
あんな男でもまんざら憎くはない、命がけで、わたしの後を追
蒐けて来る心持が可愛い」

今となつては、たとえ無頼漢ならずものであろうとも、自分に調戯からかつて

くれる男の不在が淋しいくらいでありました。

こんなことをいつまで考えていても際限がないと、お絹は浴衣の襟をつくろつてそこを立とうとした時に、縁の下の笹藪ささやぶがガサと動いて、幽霊のようなものが谷川の中から、煙のように舞い出した。あれと驚くまもなくお絹の首筋をすーつと一卷き捲いてしまいました。

「何を……何をなさるの……」

その幽霊のようなものは、お絹の首筋をすーつと捲いて、その面かおを自分の胸のあたりへ厳しく締めつけたものだから、それでお絹は、言葉を出すことができなくなっていました。

「御新造ごしんぞ、が、ん、り、き、だ、百だよ」

と言つて、有無うむを言わず縁の下へ引き下ろしてしまいました。河童かっぱに浚さらわれるというのは、ちようどこんなのだらうと思わ

れます。お絹は一言も物を言う隙ひまさえなく、欄てすりの上から川の岸の笹藪の中へ、何者とも知れないものに抱き込まれてしまいました。何物とも知れないのではない、その者はお絹の首を抱いてその面をしつかりと胸に当て、口の利けないようにしておいてから、「おれは、がんりきだ、百蔵だ」と名乗ったはずです。本陣の方では、こんなことを気のついたものが一人もありませんでした。

能登守は事務に精励であつたし、米友は与力同心を相手に気焰を吐いているし、そのほかの連中とてもそれぞれの仕事をしていたり、世間話をしていたりしていたものだから、一向この方面のことは閑却ゆうちょうされていきました。ただ一人お松だけが、お絹の湯上りがあんまり悠長ゆうちやうなのを気にして、二度までも湯殿へ来て見ましたけれど、そこにも姿を見ることができませんでした。

から、ようやく気が揉め出して米友を呼んでみようと思いましたが、その米友は、相変らず与力同心を相手に槍の気焔を吐いて夢中になつてゐるようですから、気の毒のような心持がして、それで、また三度まで廊下の方へ行つてみました。

お松が廊下を通つた時に、廊下の縁の闇の中から、

「お松」

「はい」

自分を呼んだのは、たしかに七兵衛の声です。

「お師匠さんはいるか」

「今、お風呂に……」

「風呂ではあるまい、風呂にはいないはずだ」

「ええ、今ちよつとどこへか……」

「それ見ろ」

七兵衛から、それ見ろと言われてお松はギョツとしました。

「友さん呼びましよう、御支配のお役人様もおいでなさいますから、お頼み申しましようか」

こういつてあわてると、七兵衛はそれを押えて、

「米友にも役人にも知らせない方がいい、ナニ、百の野郎は痛み所で、身動きも碌ろくにできねえのだから、大したことになるはしめえ、俺がこれから一人で行つて捉まえて来る、お前はこのまま座敷へ帰つて静かにしているがいい、米友にもやつぱり黙つていた方がいいよ、あいつが下手へたに騒ぎ出すとまた事壊ことこわしだ」

七兵衛は、これだけのことを言い残して、闇の中へ消えて行きました。

鎌のような月が相変らず笹子峠ななまがりの七曲のあたりにかかつている時に、黒野田の笹川の谷間から道のないところを無理に分け

登つて行くものがあります。肩に引っかけられた女は少しの抵抗する模様もなく、背中へグツタリと垂れた面へおりおり木の繁みを洩れた月の光が触ると、蛾ろうのように蒼白く、死んだものとしか見えません。

それを背中へ載せて路のないところを登つて行くが、んりきの百蔵。これもまた面の色が真蒼まっさおで、ほとんど生ける色はありません。木の根に助けられたり、岩の角に支えられたりして、上るには上るが、その息の切り方が今にも絶え入りそうで、やつと一丁も登つたかと思う時分に、力にした草の根が抜けると一堪ひとたまりもなく転々ころころと下へ落ちました。

「ああ、苦しい」

二三間も下へ落ちて岩の出たところで支えられた時に、がんりきは、もう苦しくて苦しくてたまらなく見えましてけれど、

その肩へ引っかけていたお絹の手首は決して放すことではありません。

はッ、はッと吐く息は唐箕とうみの風のようにあります。なんにしても、がんりきは腕が一本しかないのです。その一本しかない腕で、お絹を肩に担いで、足と身体で調子を取って上ろうとする心だけが逸はやつて、岩に足を踏掛けると足がツルリとすべりました。

「あつ、苦しい」

またも二間ばかり下へ迂り落ちたが、がんりきは、お絹と共に折重なつて、暫らくは起き上れません。

「あつ、苦しくてたまらねえ」

やっと起き直つて見ると、向う脛むねからずねダラダラと血が流れていました。

「畜生、こんなに向う脛を摺剥すりむいてしまった」

そのままにしてお絹を引っかけて、また上りはじめてまた泣きました。

「こいつはいけねえ、いくら力を入れても泣って上れねえ、はッ、はッ」

やつと一間も登ると、ズルズルと七尺も泣っては落ちる。

「こんなことをしていたんじゃあ始まらねえ、帯はねえか、帯は」

ここに至つてが、んりき、は、とても手首を掴まえて肩にかけて上ることの覚束おぼつかないのを悟つたから、帯を求めて背中へ括くりつけて登りにかかろうと気がついて、はじめて手首を放して大事そうにお絹の身体を岩蔭に置きました。

「死んでいるんじゃないやねえ、殺したと思うと違うんだよ、もう少

し辛抱すりや活いかして上げますぜ御新造、はッ、はッ」

例の鎌のような月が、微かながらその光を差して、真白なお絹の面と肌とが活うなきて動くように見え出した時、が、ん、り、き、は、ど
こかで大木の唸うなるような音を聞きました。

猫が鼠を捕った時は、暫らくそれをおもちやにしているように、自分でそこへ抛り出したお絹の面かおを見ると、が、ん、り、き、は、物
狂わしい心持で、

「こうしちやいらねえんだ」

再びお絹を背負い上げて登りはじめようとしたが、この時はが、
ん、り、き、の身体もほとんど疲労困憊ひろうこんぱいの極に達して、自分一人でさ
え自分の身が持ち切れなくなっていました。この女を荷になつ
てこの崖路がけみちを登ることはおろか、立って見つめているうちに、眼
がクラクラとして、足がフラフラとして、どうにも持ち切れな

くなつたから、が、ん、り、き、は、お、絹、の、傍、へ、打、倒、れ、る、よ、う、に、し、て、烈
しい吐息といきを、は、つ、は、つ、と、つ、き、な、が、ら、峠、の、上、を、仰、い、で、

「矢立やたての杉が唸うなつていやがる、矢立の杉が唸ると山に碌ろくなこと
はねえんだ。せめて、あの杉のところまで行きたかつたんだが、
この分じゃあもう一足も歩けねえ、といつてこれから下へも降
りられねえ、自分ながら自分の身体が始末にいけねえんだから
じれつてえな。うまくせしめるにはせしめたけれど、これだけ
じゃあ何にもならねえや。俺の腕はこんなもんだということを、
七の兄貴にも見せてやりてえし、糸の親分にも見せてやりてえ
んだ。それからまた、勤番の御支配とやらが泊っている本陣か
ら盗み出したといえは、ずいぶん幅が利かねえものでもねえ、こ
れからこの女を連れて一足先に駒飼こまかいまで行つて、そこで、どん
なものだとみんなの面を見てやりやあ、後はどうなつたつて虫

がいらあ。峠を越してしまわねえうちは、こつちのもんでこつちのものでねえようなものだから、なんとかして漕ぎつけてえんだが、身体が利かねえから仕方がねえ。ああ、ほんとに弱つた、死んでしめえそうだわい」

が、ん、り、き、は、つ、い、に、そ、こ、へ、へ、た、ば、つ、て、動、け、な、く、な、り、ま、し、た。
が、ん、り、き、が、動、け、な、く、な、つ、た、時、分、に、お、絹、が、少、し、く、動、き、出、し、て、
き、ま、し、た。お、絹、が、少、し、動、き、出、し、た、時、分、に、下、の、方、で、喧、ま、し、い、人、
の、声、上、の、方、で、も、ま、た、人、の、声。

昏倒しかけたが、ん、り、き、は、お、絹、の、動、い、た、こ、と、に、は、ま、だ、気、が、つ、
か、な、か、つ、た、け、れ、ど、上、下、で、起、る、そ、の、人、の、声、は、早、く、も、耳、に、入、る、と、
必、死、の、力、で、む、つ、く、り、起、き、直、つ、て、見、る、と、提、灯、の、光、が、い、く、つ、も、
い、く、つ、も、黒、野、田、の、方、か、ら、谷、川、と、崖、路、を、伝、う、て、こ、ち、ら、を、差、し、て、
来、る、の、が、わ、か、り、ま、す。

上の方、矢立の杉のあたりからもまた火影ほかげがチラチラ、してみると自分はもう取捲かれていたのだ。がんりきは遽にわかに立ち上つてよろめきながら、

「トテモ逃げられなけりや、ここで心中だ。生きて峠が越えられねえのだから、死んで三途さんずの川を渡るのも、乙おつな因縁いんねんだろうじゃねえか。道行の相手に、まあこのくらいの女なら俺しんじょうの身上では大した不足もあるめえ。猿橋の裏を中ぶらりんで見せられたり、笹子峠から一足飛びに地獄の道行なんぞは、あんまり洒落しやれすぎて感心もしねえのだが、どうもこうなつちやあ仕方がねえ」
がんりきがお絹の傍へ寄つた時、

「な、何をするの」

お絹は生きていました。自分の咽喉へかけようとしたが、がんりきの手を、夢中で振り払うと、

「おや」

が、んりきも驚いたが、その途端にフラフラとまたしても岩をすべると、あわててその片手にお絹の着物の裾を掴む。裾を掴んだけれども、すべる勢いが強くてお絹もろともに釣瓶つるべ落しに谷底へ落つこちます。

九

その翌朝、駒井能登守の一行は例によつてこの本陣を出立しました。お絹、お松、米友の一行は、それに従つて行く様子がありません。

昨夜、七兵衛はお松にことわつて誰にも言うなと言つたにかかわらず、お松はそれを黙っているわけにはゆかないから、与

方同心を相手に気焰を揚げていた米友を呼んで話しました。それから騒ぎが大きくなって、居合わすもの総出の勢で、山狩りをして峠の方へ狩り立てて行くうちに、尋ねるお絹が半死半生の体で谷間から這い出して来ました。

ともかくも、お絹が逃げて来たことによつて、一同も安心して宿へ引取つたが、お絹は一切のことを語りません。それ故に誰もその事情を知るものがなく、或いは山の天狗に浚さらわれたのではないかと思つています。

無事で逃げて帰ることのできたお絹は、実は能登守の一行について行きたかつたのだけれども、身体が弱っているから、心ならずもここに留まることになりました。

かくて駒井能登守の一行が黒野田を出ると、幾力所の橋を渡り、追分を通つて、いよいよ笹子峠へかかりました。

「これが笹子峠の矢立の杉」

中の茶屋を通つて、矢立の杉の下で一行が立ち止まつてその杉を見上げました。

「ははあ、矢立の杉というのはこれか」

と言つて杉のまわりをまわり歩いてゐる連中が、面白半分に手を合せてその杉の大きさを抱えてみました。

「ちようど七抱ななかかえ半ある」

「昔の歌に、武夫もののふの手向たむけの征箭そやも跡ふりて神寂かみさび立てる杉のもと、とあるのはこの杉だ」

「ナニ、なんとと言われる、その歌をもう一度」

と言つて、写生帖を持つていたのが念を押しました。

「武夫の手向の征箭も跡ふりて神寂び立てる杉の一もと」

「なるほど」

写生帖へその歌を書き込んで、

「読人はよみびと」

「読人知らず」

「年代はいつごろ」

「これも知らぬ」

「ははあ、よく歌だけを記憶しておられた、感心なこと」

と言つて写生帖が感心すると、古歌の通つうが笑つて、

「ここの石に刻きざんであるからそれで知つたのだ」

「ははあ、石碑の受売りか。その石碑もまた相当に古色があつて面白い、年代はいつごろだろうか知ら」

「よく年代を知りたがる人じゃ」

「ええ、明曆めいれきとある、肝腎かんじんの年号の数字のところが欠けていて

見えない、明暦も元年から始まつて三年までである、げんゆういんさま 嚴有院様の時代であつて、左様、今から考えると、ざつと二百年の星霜を
経ている」

「してみると、その歌もその時代に詠よまれたものであろう」

「いや、もつと調子が古いわい、江戸時代の産物ではない。いつ
たいこの笹子山は一名坂東山ばんどうやまといつて、古来、関東で名のある
山、やまとたけるのみこと 日本武尊以来の歴史がある」

「なるほど、してみるとその歌は、日本武尊がお詠みなされた
お歌ではないか」

「違う、日本武尊時代にはこんな和歌は流行はやらなかつた」
杉の根もとで勝手な考証を試みています。

「古来、この道を軍勢が通る時は必ずこの杉に矢を射立てて、山
の神に手向けたむをして通るならわしになつていた」

「我々もその古例を追うて、弓矢の手向けをして行こうではないか」

「我々ののは、甲州を治めに行くので、征伐に行くのとは違う、それ故、弓矢の手向けをするにも及ぶまい」

「天文十六年の事、原美濃守がこの関所を千貫に積つて知行ちぎようしている、もし武田勝頼が天目山で討死をせずに東へ下つたものとするれば、この峠が第一の要害になつたのであろうけれど、このことなくして止んだから、この峠に軍勢を上せたことは、まず近代にはないようである。小田原北条の一族、左衛門太夫氏勝うじかつが八千余騎でここに陣取つて足輕を駒飼まで進めたこと、これが近ごろの記録であるようじゃ」

「よくお調べでござるな」

「それから昨夜、土地の人に就いて聞けば、山に何か異変が起

る時は、この杉が唸るといふことじゃ」

「杉が唸るといふのも、おかしなことであるけれど、風でも吹けばこれほどの大木ゆえ、じつとして黙つてはいまい」

「それから時々、この杉の頂辺へ天狗が来て巢を食ひ、おりおり下界から人を浚つて来てこの杉の枝へ突っかけて置くといふことじゃ」

「ははあ、天狗が留るか。なるほど、木もこのくらい大きくなれば、いかさま天狗が住めそうじゃ。それといえ、昨夜あの婦人、あれがもしやその天狗に浚われたのではないか」

「なるほど、よいところへこじつけたものだ。或いはその天狗がまだ一人二人の婦人を浚つて、この杉の枝へ掛けて置くやも知れぬ、よく調べてみるがよい」

「しかし……また婦人の拳動は、あれは考えものだな」

杉の考証と伝説は転じて、昨夜のお絹の挙動及びその行方のことになりました。

お絹が一切を語らなかつたから、これらの人々も何と判断のつけようがなく、結局この矢立の杉あたりに棲む天狗の仕業しわざという里人の迷信を打消しもせずに出て来たものでありました。けれども、ここで考え直してみれば、どうしても解げせぬことでもあります。

「さてこの道中は、いろいろな珍らしいことに出会でつくわす。顧みて数えると、まず駒木野の関所である女、次に小仏峠で足の早い奴、それから鶴川では槍をよく使う小兵こひょうの男、それから猿橋へ来て橋へ吊されたものが前の足の早い奴で、また片手の無い奴、それを捉まえてみるとその夜のうちに消えてなくなる」

「それらと考え合せると、昨夜の婦人の挙動、それから前のい

ろいろの珍事にいちいち糸が引いてあるようにも思われる、もしあの片手のない奴が、昨夜の婦人を浚つて逃げたのではないかとも思われる、そうだとすれば婦人が一人で帰つたのがおかしいけれど、あの片手の無い奴はこのあたりの山に隠れているかも知れぬ」

猿橋の間屋で逃げられたが、んりきのこと、もしやこの道中のいずれにかと、雑談に耽^{ふけ}りながら左右に眼を配りつつ進んで行つたが、笹子峠の七曲りというのへ来た時分に、

「あれあれ、あの谷川で水を飲んでゐる者があるぞ」

駒井能登守が谷底を望んでこう言いましたから、一同はみんな谷底をのぞいて見ました。

駒井能登守が水を飲んでいたものを見かけたのは、峠が下りになつてから五六丁のところ、そこは俗に坊主沢ぼうずざわといつて橋

の棧道さんどうがいくつもかかっている、下には清流が滾々こんこんと流れているところだ。能登守が、そこで水を飲んでゐる何者かを見かけて声をかけた時は、その者は鼬いたちのように山の中へ駈込んでしまいました。

その駈込んだところを誰もチラと見たものですから、それと言つてバラバラと追いかけてはく。

それからの一行は、写生帖も史蹟の話もなくしてその怪しい者を捕えるべく、前後左右から遠網にかけるようにして、峠を下りつゝいたところが駒飼こまかいの宿であります。

駒井能登守の一行がこの怪しの者を、駒飼の宿に近いところまで追い卸おろした時分に、それとは逆に甲州街道を、鶴瀬つるせから本陣の土屋清左衛門の許を立て、お関所を越えて駒飼の方へ行く一行がありました。これも槍を立て数人の供を引きつれて東

に下るものと見えました。これは供揃ともぞろいはさほどでなかつたけれど、乗物を三つも並べたところが物々しい。その三つの乗物のうちの一つには人がいたけれど、あとの二つは空からでありました。その一つに乗っている人というのは神尾主膳でありました。してみれば、明いている二つの乗物の用向も大抵わかる。主膳は遊山がてらにお絹お松の一行を迎えに来たものと見てよろしい。実は笹子峠のこちらまで迎えるつもりであったのを、どうしてもこの峠を越し大庭おおばまで行かなければならなくなった事情が出来たものであります。

「殿様」

「何だ」

「あれが天目山の道でござりまするな」

「左様」

「必ず天目山へ上つてみると仰せでございましたが、どうしてまた急にお模様替えなのでござりまする」

「昨夜、急用が出来た故、山のぼりなどをしてはおれぬ」

「急用と申しますのは？」

「黒野田の宿で、何か変事が出来たということじゃ」

「へえ、あのお絹様と、それからお松どのが何か難儀にお遭いなされましたか」

「左様」

「それは大変でござりまする。してその難儀と申しまするの
は？」

「くわしいことはわからぬが、盗賊か胡麻ごまの蠅はえに過ぎまいと思
う」

「それはまことに心がかりでござりまする」

「とにかく、黒野田へ行つて見ての上でないと拙者にもわからぬ。それから滝田、この道中、ことによると駒井能登守という旗本と出逢うかも知れぬ、それはこのたび、甲府へお役になつた拙者の知合いだ、たぶん我々が峠へ登る時分に、駒井は下りて来るだろうから、やがて行逢つた時は、乗物を下りて名乗り合ふのはこと面倒だから、知らぬ面かおをして通れ」

「かしこ畏まりました」

「なるべくならば神尾主膳と名乗りたくない、尋ねたならば、すわ諏訪の家中で江戸へ下るとでも申しておいたがよろしかろう」

「畏まりました」

こうして神尾主膳の一行が関所を出て橋を渡つて休所の、すしや重兵衛の前を通つて駒飼こまかいへと進んで行きました。

その時は、まだ早朝のことでありました。神尾主膳の一行が

駒飼の宿から出て、いよいよ笹子峠の上りにかかろうとする時分に、不意に傍かたえなる林の中から人が飛び出して、主膳の駕籠わきに転がってしまいました。

「何者だ」

といって家来の連中が立ち塞ふさがると、

「どうかお助けなすつておくんなさいまし、どなた様かは存じませぬが、九死きゆうし一生いっしょうの場合でございます、お見かけ申してお願ひ申すんでございます、どうかお助けなすつて下さいまし」

駕籠の傍へ手をついたのは、なるほど、九死一生と見えて髪は乱れ、白い着物は裂け、身体じゆう突傷つききずだの擦傷かすりきずだので惨憺さんたんたるもので、その上に右の片腕が一本無い男であります。

「次第によつては助けてやるまいものでもないが、其方そのほうは何者だ、どうして斯様かようなことになつた」

「身延山へ参詣する者でございます、途中で悪い奴に遭つてこんな目に逢わされてしまいました、お話し申せば長いことでございます、ここではお話が申し上げられません。あれ、いま追手がかかります、追手というのはお役人でございます、お役人が間違えて、私を悪者だと思つて捉つかまえに来るんでございます、今お役人につかまつては、私も言い解くことができせんから、どうか暫らくおかくまいなすつて下さいまし、そのうちにキツと私の罪のないことがわかるんでございます、同じことならあのお役人に捉まりたくないんでございます」

「はて、其方を追いかける役人というのは？」

「今、向うからやつて参ります、今度、江戸表からお越しになつた駒井能登守様というお役人の御人数でございます、あのお方に捉まると私が是が非でも悪者にされてしまいますから、どう

かお助けなすつておくんなさいまし、もうこの通り身体が弱つていきますから、一足も動けませんでございます」

「なるほど、其方を追いかけて来たのは、駒井能登守の人数であると申すな」

「左様でございます、あれもう、ああやって追いかけて参ります」

「殿様、お聞きの通りの次第、いかが取計らつたものでござりましょう」

「よし、助けてやれ」

「では能登守様から故障がありました節は、いかが取計らいましょう」

「拙者が引受けるからよろしい」

神尾主膳は一諾してしまいました。怪しい奴は弱りきつてい

たにかかわらず、この一諾を聞いて躍り上るほどに喜んで、

「有難うござりまする、この御恩は死んでも忘れは致しませぬ」

神尾の駕籠を拝みます。神尾はそれを見て、

「どこの何者か知らんが、危急と見受ける故、ともかくも一応助けて取らせる。滝田、幸い駕籠が二つ空いている、それへこの者を載せてやれ」

「^{かしこ}畏まりました。これ、殿様がお助け下された上に、この乗物をお貸し下さる、有難く心得てこの中へ入れ」

「何から何まで有難うございます、それでは御遠慮なしに、お言葉に甘えまして、どうか御免下さいまし」

お絹を乗せてつれて帰るべき乗物へ、怪しい奴を乗せてやりました。怪しい奴はすなわちが、んりき、の百蔵であります。

そうしておいて神尾は、

「もし能登守の手の者が何とか尋ねても、知らぬ存ぜぬと言つてしまえ、むつかしくなれば拙者が応対に出る、其方たちは取合わずに乗物を進めろ」

果していくばくもなく、神尾主膳の一行の前にバラバラと駆けて来たのは、駒井能登守の手の与力同心とお手先の者共でありました。

「失礼ながらそのお乗物、暫らくお待ち下されたい」

「何の御用でござる」

「ただいま、一人の怪しき者を追い込んで参りましたところ、この辺にて姿を見失い申した、もしやお見かけはござらぬか」

「とんとお見受け申さぬ」

「はて」

と言つて能登守の手の者は、挨拶に出た主膳の家来どもを怪訝けげん

な眼でながめ、

「ただいま、このところでたしかにその者の姿を見かけたものがござるが」

「我々の方においては左様な者を一向に見かけ申さぬ」

「年の頃は三十ぐらい、色が白く、小作り、もとは江戸の髪結職かみゆいしよくであつた者、それに誰が眼にも著しいのは左の片腕が無いこと」

「ははあ」

「怪しい廉かどが多い故、いちおう取押えて置きたい」

「それは御苦労千万。しておのおの方は？」

「我々は、このたび甲府勤番支配を承つた駒井能登守の手の者、甲府へ赴任の道すがらでござるが」

「しからば、これより峠を登り行くうち、まんいち左様なものに出逢い申さぬとも限らぬ、その折は取押えてお引渡しを致す

でござろう、これにて御免」

これにはかまわずに、乗物を進めようとするから、能登守の手の同心と手先はあわててその前に立ち塞がるようにして、

「あいや、お暇は取らせぬ、暫時ざんじお待ち下されたい。して御貴殿方はどなたでござるか、お名乗りを承りたい」

こう言つて能登守の手の者が、神尾の駕籠先を押えるようにしました。ここに至つてドチラにも多少の意地ずくが見えませんでした。

「おのおの方にお名乗り申す由はない。たつて姓名が承りたくば能登守直々じきじきにおいであるがよろしい」と神尾の者がこう言いました。

この時に、駒井能登守と渡辺という与力が、峠を下りて近いところまでやつて来ました。

それと聞いて渡辺は神尾の駕籠近く寄つて来て、

「お乗物の中へ物申す、拙者は甲府勤番支配の与力渡辺三次郎、失礼ながらお名乗りを承りたい」

この時に神尾主膳が駕籠の垂たれを上げて外を見ると、おりから来かかった駒井能登守と面かおを合わせたが、さあらぬ体ていで、

「拙者事は、同じく甲府勤番の組頭神尾主膳でござる、今日は私用にてこのところを通行致す故、公用向きの礼儀は後日に譲る、お尋ねの怪しい者とやら一向に我等は存知致さぬ、前路にちと急の用事あるにより、これにて御免」

こう言つたまま、垂を下ろさせてさつさと駕籠を進ませました。だから能登守の左右の者が、その無礼を憤いかつて眼と眼を見合わせると、能登守はなにげなき風情ふぜいで取合いません。

こうして神尾主膳の一行は笹子峠を向うへ越えて、黒野田の本陣へ着きました。

黒野田の本陣へ神尾の一行が着いた分には仔細がないけれど、その一つの駕籠の中に隠して来たが、んりきをこの宿へ連れ込むとすれば無事ではないはずだが、一行がこの本陣の前へ着いた時に、が、んりきの駕籠だけはここへ留めないで、「鳥沢まで送つてやれ」ということになったのは、思うにまたしてもその鳥沢の糸という親分のところまで送り返されるものであらうと思われる。

が、んりきだけを鳥沢へ送りとどけて、神尾の一行が、この本陣へ着いた時に、本陣では前の晩に能登守を泊めたと同じぐら

いのもてなしをせねばなりません。

そうしてそれぞれ失礼のないようにお迎え申したけれど、ここに奇怪なのはお絹の素振りそぶりでありました。この時、お絹はもう昨夜の災難のことなどは、ケロリと忘れてしまっているようでした。朝寝を少し永くしたぐらいのところ、主膳を迎うべく薄化粧などをして、主膳が着くと、真先に立つて下へも置かぬもてなしが、何も知らぬ本陣の人々には別段おかしくもなかつたろうけれど、前後を知っているお松には、あんまりそらぞらしいように思われてなりませんでした。

なぜならば、駒井能登守をもてなす時は、神尾の殿様などは有つても無くつてもいいような口振をして見せたのに、その能登守が去つて神尾主膳が来てみると、能登守なんぞはどこを通つたかというようにして、もう一も二も神尾でなければならぬ

ように、そわそわしているからであります。よくもこうまで手のうらを返すようになれるものかと、お松がそれをあまりにそらざらしく浅ましく思つたのも無理はありません。そののみならず、神尾がここへ着くと共に、早速に酒宴が始まつて、お絹が先立ちでその周旋とりもちをするという体ていたらくになつてしまい、お松が座を外して隠れるようにしていると、神尾主膳は、お絹を相手にして盛んに飲みながら、お前もひとりで貞女暮しは淋しいことだろうとか、殿様も甲府ではまた罪をお作りになつたこととでございましょうとか、お松か、あれも年頃になつたな、お前の仕込みだから抜かりもあるまいとかいうような言葉を洩れ聞いたお松は、面かおから火が出るようでありました。

ここに憐あわれむべき宇治山田の米友は、己おのれの間まに閉じ籠こもつたま

ま、沈痛な色を漲みなぎらせて腕を組んで物思いに耽ふけつています。

米友は、ここまでの道中で二度失敗しくじったことを良心に責められていきます。

米友が失敗ったその一度は、上野原の宿で一行に出し抜かれて、無理な鶴川渡りをしてやつと追いついた事、その二度目は昨夜の騒動であります。

彼は、この道中が終るまでは、寸分すんぶんの隙もなくお絹とお松とを守っておらねばならぬ使命がある。彼自身もまたその使命を粗末にしようとは思っていなかったのに、昨夜という昨夜、与力同心に招かれて槍の話になつて、有頂天うちようてんに気焰を吐いてしまいました。

その隙にお絹が天狗に浚さらわれたのだから、幸いにしてお絹は帰つて来たからいいようなものの、もし帰らなければ、所詮しよせん自

分の腹切り勝負だと思いました。とてもここにこうしてはいら
れぬ、面目のないことだと思いました。米友は、それ故に良心
の呵責かしやくを受けています。しかし、米友の単純な心でも、どうも
あれからのお絹の挙動が解げせない、他の人が騒ぐほどに騒がな
いお絹の心持がわかりません。髪容かみかたちや着物のさんざんになつて
帰つて来たところを見れば、かなりヒドイ目に遭つて来たのだ
ろうと思われるにもかかわらず、そのヒドイ目に遭わした奴に
仕返しをしてやろうという気が更に見えない。仕返しをしてみ
ようという気がないばかりでなく、そのために山狩りをして悪
い奴を捉まえようとするのを、よけいなことのように見ていま
す。

それよりもなおわからないのは、昨夜あれほどに人騒がせを
やった当人であるにかかわらず、今日はもうケロリとしてしまつ

て、甲府から迎えに来たというお武士さむらいを引張り上げて、あの通り御機嫌よくもてなしているということが、正直な米友いまいまにとっては忌々しいことです。

あんなとりとまりのない人間を、槍を持って番人に廻っているのがばかばかしいと考えている時に、障子が不意にあきました。見ればやや酒気を帯びたお絹がそこに立って、

「友さん」

「うむ」

「昨夜はゆうべどうもお騒がせをしました、あの甲府から神尾主膳様がお迎えにおいで下すつて、お供の衆もたくさんついていますから、もうこれからは安心、今までお前さんにもいろいろお世話になりましたけれど、これからはもうお前さんの勝手に旅をしてようござんすよ」

「ええ？」

「お前さんは、これから江戸の方へ帰りなさるとも、また甲府の方へ行つてみようと、もうわたしたちにかまわないで、自分の気儘きままにしておいでなさい」

「うむ」

「これは少しだけれど、ほんの、わたしたちの志こころざし、どうぞ納めておいて下さい。それから、もしお前さんが甲府へ行つても、今までの調子で心安立こころやすだてに、殿様のお邸なんぞへ無暗にやつて来られては困ることもあるから、そこは遠慮をしておいてくれ、そのうち御縁があればまた何とかして上げないものでもありませんからね」

金一封を包んでそこに置いたまま、眼をパチパチさせて口を吃どもらせている米友を見返りもしないで、お絹はさつさよこの場

を立つて行きました。

お絹の置いていった金一封を前にして米友は、暫く呆然ぼうぜんとしていたが、やがて冷笑に変わってしまいました。

「ばかにしてやがら」

その一封を横の方から突いてみました。突いてみたのはなにも、その中にどのくらい入っているかというのを試したわけではありません。あんまりばかばかしいから、小突こづき廻してみただけであります。米友は、これらの連中の譜代の家来でもなければ臨時の雇人でもない。甲州へ行こうというのは、必ずしもこの人の附添が目的なのではないのです。これは行きがけの駄賃のようなもので、米友はお君に会いたくてたまらないから、それで甲州へ行く気になったものであります。

この附添は頼んだものでなくて頼まれたものである。いつ断

わられたところで敢て痛痒つうようを感じずるわけではないけれど、ここで断あえわるといふのは、あんまり人をばかにした仕打ちであると思あえいました。それだから米友は、

「勝手にしやがれ」

と言つて、またその金一封を小突き廻まわしました。金一封を小突き廻まわしたところで始はじまらないのであるが、この場合、米友の癩癩かんしゃくのやり場としては、どうしても眼の前の金一封がま的とになります。

「ばかにしてやがら、こんな金なんぞ要いらねえ」

米友はいったん、左の方から小突き廻まわした金一封を、今度は右の方から小突き廻まわしました。その有様は、搦つかんで抛なり出すのも汚けらわしいといった手つきであります。

よしよし、これからは一本立ちで甲府へ行つて見せるとも、峠を越せば甲府まで一日で行けるといふことだ、小遣こづかいだつて何も

そのくらのことには困りはしない、こんな金なんぞ要るものか、突返しに行くのも、あの女の面つらを見るのが癪だから、と言って置放しにして行けば、誰か取ってしまった時に米友が持つて出たと思われるのが業腹ごうはらだと米友は、眼の前の金一封を睨にらめながら、腹を立てたり始末に困ったりしていましたが、結局庭へ抛り出してしまふのがいちばんよろしいと考えました。庭へ抛り出して撒き散らかして置けば、人の目に触れて、自分が持つて出なかつた証拠が立つと思ひました。米友はその金一封を掴んで、ゲジゲジでも取つて捨てるような手つきで持ち出して、障子をあけてポンと庭の方へ、それもお絹の部屋の方へ近く、なるたけ人の眼に触れるようなところへと思つて投げ出しました。米友に投げられた金一封は、庭の松の木の幹に当つてコツンと音がしましたけれど、かなり固く封がしてあつたと見えて、

そのまま転がつてしまったから、とても、梅忠うめちゆうがやったような花々しい光景にはなりません。

「ちえッ」

米友は舌打ちをしてその抛り出した金一封を尻目にかけてながら、自分は手荷物と例の手槍きやはんと脚絆きやはんなんぞを搔き集めて、旅の仕度にとりかかります。

旅の仕度が出来上つて、いざと米友は縁へ出ましたけれど、いま投げ出した金一封が、封のまままでゴロリとそこに転がつているのが眼ざわりでたまりません。

米友の気象として、決してその金一封に未練があるのなんのというのではないけれど、ああして置いて誰にも見られないでほかの人に拾われてしまつては、結局やはり、自分が持つて逃げたように思われてしまうのが心外であるから、松の根方に転

がつている金一封を暫らくながめていましたが、そのうち、「そうだ、そうだ、お暇乞いとまごいの印しるしにあいつの座敷へこれを抛り込んでやれ」

何か思案がついたと見えて、庭へ飛び下りて、その金一封を拾い取るや米友は覘ねらいを定めて、それをお絹の座敷へ障子越しに投げ込みました。

その時に、お絹の座敷にはお絹がいませんでした。お松がひとりで机によりかかつて、本陣で貸してくれた本を讀んでいました。

そこへ怖ろしい音がして、障子を突き破つてちようど自分の讀んでいた絵本の上へ、重い物が落ちて来たからお松は吃驚びっくりしました。もう少しで自分の眉間みけんへ当るところであつた。誰がこんな悪戯いたずらをしたのであろうと、お松は急いでその破れた障子を

あけて見ました。

障子をあけて見ると、米友がいま丸くなつて植込の中を向うへ逃げて行く姿が見えましたから、お松は何のことだかわけがわからずに、

「友さん、友さん、今ここへ石を投げたのはお前かえ」

と言つて廊下を追いかけるようにしてみましたが、米友は返事もしなければ、振返りもしないで、例の足どりで逃げて行つてしまいます。お松はいよいよ事情わけがわからないけれど、米友はすっかり旅の装いよそおをして逃げて行くから、ともかくもつかまえて、様子を聞いてみなければならぬと思ひました。米友は気が短くて怒りっぽいし、それに時々勘違いをして怒り出す癖があるから、これも何か気に入らないことがあつて逃げ出すのだらうと思つたから、呼び留めて事情わけを聞いた上で、理解して

やりさえすれば直ぐに納まるものと、大急ぎで廊下を駈けて有合せの草履ぞうりをつつかけて米友を追いかけました。

表から逃げないで、裏の方の笹川へ沿うたところの細い道を逃げて行く米友を、お松は追いかけてながら、

「友さん、どうしたのです、そう無暗に逃げてしまつては事情わけがわからないじゃありませんか、少し待つて下さい、事情を話して下さい、わたしたちを置いてけぼりにして逃げてしまうのは酷ひどいじゃありませんか、少し待つて下さいよ、ね、友さん」

お松がこう言つて呼びかけた声の聞えないはずはありませんのに、米友はあとをも振返らず、いよいよ一生懸命で逃げて行きました。

「友さん、事情わけがわかりさえすれば、お前まへの出て行くのを留めはしませんから、ちよつと待つて話をして行つて下さい、ね、

友さん、何が気に入らないの、わたしはこんなに疲れてしまつた、これほどにしてお前を追いかけて来たのに、お前が聞かないふりをして行つてしまえば、もし甲府へ着いた時に、君ちやんの在所あしかがわかつてもお前には知らせて上げないよ」

お松は駈けながら息を切つて、こう言ふと、この遠矢とおよが幾分か米友に利いたと見えて、米友は急に立ち止まり、

「お松さん、お松さん、俺おいらはこれからひとりで甲府へ行くんだ、俺らがどういふわけでひとりで甲府へ行くようになったのか、いま投げてやった包み物に聞いてみるがいいや、お前さんには何も恨み恋はねえんだ、甲府へ行つたらお目にかかりましようよ」

米友は後ろを振り返つて、お松に向つて大きな声で返事をしました。

「そんなことを言わないで」

お松が押返して言うのと、

「今まではお前さんたちと仲よくして来たけれど、これからは他人なんだ」

米友は頑がんとして首を振ると共に、クルリと背を向けてしまいました。米友はついに留まりませんでした。お松は再び追いかける余力がないので、米友の姿が山の中へ隠れてしまった時分に本陣へ帰つて来ました。

お松はもとの座敷へ帰つて来て、米友の言い残して行つた言葉、いま投げてやった包みに物を聞いてみるがいいと言つたことを思い出したから、机の上に置いてあつたあの紙包を取つて見ると、それは若干いくばくかの金の包みであります。

聡明なお松は、早くもそれと合点がてんをしました。お師匠様のお

絹が、この金を米友に与えて暇を出してしまつたものだろうと感づいたことでもあります。役に立つても立たなくても一緒にここまで来たものを、もう目的地まで一息というところで暇を出すのは、人情に叶かなつた仕打ちではないとお松は恥かしい思いをしました。お師匠様のお絹という人は、そのくらいのことをしかねない人。なるほど、神尾の殿様やその家来衆が迎えに来てくれてみれば、米友に附添を頼む必要はなくなつてしまつたかも知れないけれど、ここでもう用はないからと言つて金包を出されたら、大抵の人は氣を悪くするに違いないと思ひました。ましてやあの氣の短い米友が怒り出して、この金包を叩きつけて逃げるということに、お松はかえつて氣の毒に堪えないのであります。

そこへ、お絹が見えたから、お松は米友が投げて行つた金包

を出して事情を話してみると、お絹は、

「それほど粗末になるお金なら返してもらいましょう、わたしに遣つかわせればいくらでも遣いみちがあるから」

と言つて、恬てんとしてその金包を再び自分の手に納めた上に、

「ほんとに、素直すなおに出て行つてくれてよかつた。何かの力になるかと思つて頼んでみたら、力になるどころか、かえつて世話ばかり焼かせてしまつて、この後、どんな間違いを起すか知らぬものではない、今のうちに出て行つてくれたから助かつたよ
うなものさ」

お絹はこう言つて、その金を懐中へ入れてまた、神尾主膳の居間の方へと出て行きました。

それと同時にお松は、犇ひしとわが身に頼りなきの心が湧いて来るのを禁とどめることができませぬ。

大菩薩峠 駒井能登守の巻

大菩薩峠 駒井能登守の巻

底本：「大菩薩峠 3」ちくま文庫、筑摩書房
1996（平成 8）年 1 月 24 日第 1 刷発行
1996（平成 8）年 3 月 1 日第 3 刷

底本の親本：「大菩薩峠」筑摩書房
1976（昭和 51）年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 10 月 5 日公開

2004 年 3 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。